創立百周年

記念誌

平成20年11月23日

東村立高江小学校

創立百周年

記念誌

平成20年11月23日

東村立 高江小学校

高江小中学校校旗

(1) 校旗の意味

山に囲まれた小さな学校だが、全校生徒が手を繋ぎ、職員・父母・地域の人々に温かく見守られて育つ高江っ子は、勤勉で弛まぬ努力で身を立て、将来は世界に雄飛する人材が出て、沖縄の、日本の星となり、高江の名を高めるであろう。

(2) 図案の説明

① 形について

・星 .....星と輝く
・鎖 .....児童・生徒が手をつないだ様子
・円 .....児童、生徒、父母、職員、地域の和
・羽 .....五大州（世界)への羽ばたき
・ペン .....勤勉・努力

② 色彩について

・緑 .....高江の山々を象徴した色で、若さ・清純
・赤 .....情熱・勇気・元気
・黄 .....希望・明朗
・青 .....冷静・沈着
・白 .....純真・純朴

(3) 校旗の制定

当初、本校には校章はなく、当時の児童・生徒会の要望により、生徒と教諭の図案共同製作のもとに、1966年11月27日の60周年記念式典において校旗(高友会より寄贈)ができた。

この校旗は37年も経て損傷が激しいため、2004年1月6日にＰＴＡ会長より、新調された校旗が児童・生徒会長に手渡された。

現在の高江校

高江校へ寄贈された花と作品

贈：國吉朝子、仲村美智子
親泊美奈子、宮城綾乃

画：高江洲義政

作：真栄田義治

のぼりがま

高江校をとりまく
やんばるの自然

揮毫　比嘉良昭

夢

人はみな夢がある
夢は明日への希望である
希望に向かって励み続ける
それが人生

宮城長太郎

創設された高江分教場に、初代教員として
宮城長太郎、岸本ツルが赴任した。

揮毫　比嘉良昭

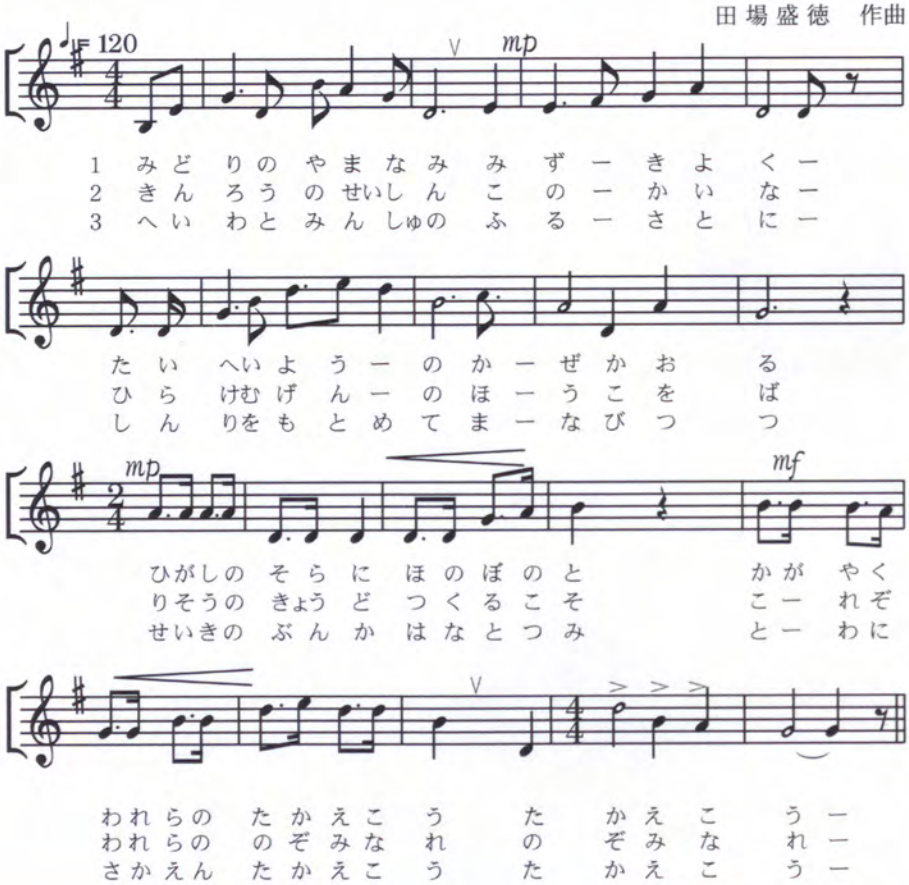
高江校発祥の地記念碑

高江校は明治41年に太平洋に眺望が開ける
この地に川田尋常小学校の分教場として創設された

郷友会の皆さんの強い要望により
この碑は建立された

校　　歌

吉川安一　作詞
田場盛徳　作曲



高江校校歌
～昭和13年頃（戦前）～

作詞：本永 昌保先生
作曲：不詳

採譜：仲間 利江子（東小中学校）

1　たまの　ながれの　あらかわの　　はな　さくほとりに　よりそって
2　よもに　つらなる　みねみねの　　あ　かきせみち　とたいようの
3　りょうふ　うかおる　がくそうに　　いり　てはてんかの　りをまなび

いらかぞわれらのけんじらの　　すだったのしきまなびやぞ
はろうにうそぶくぜっぺきぞ　　われらたのしきがくのにわ
いでてはてんかにごうれいす　　われらがいきをひとしるや

高江校校歌　（昭和十三年頃　戦前）

作詞　本永　昌保先生
作曲　不詳
資料提供　西銘芳

一

玉の流れの新川の
花咲く畔に寄りそって
いらかぞ我らの健児等の
巣立つ楽しき学び舎ぞ

二

四方に連なる峰々の
赤き瀬道と太陽の
波浪に嘯く絶壁ぞ
我等たのしき学の庭

三

涼風にかおる学窓に
いりては天下の理を学び
出でては天下に号令す
我等が息を人知るや
我等が息を人知るや

高江小中学校創立百周年記念誌

目次

■巻頭グラビア

■発刊のことば.....期成会会長　比嘉良昭

第一章　創立百周年記念行事

(1) 式辞　学校長　宮原信也.....2
(2) 期成会会長挨拶　期成会会長　比嘉良昭.....3
(3) 百周年児童あいさつ　児童会長　石原鈴也.....4
(4) 祝辞　沖縄県教育委員会教育長　仲村守和.....5
　　東村村長　伊集盛久.....6
　　東村教育委員会教育長　吉本健夫.....7
(5) 写真で見る百周年記念式典事業概要.....8
(6) 百周年記念式典・祝賀会スナップ.....11
(7) 20年度現在の児童生徒.....21
(8) 20年度就任教職員の紹介.....27

第二章　思い出のアルバム

・上の学校編.....30

第三章　思い出のアルバム

・下の学校編.....110

第四章　百周年記念事業概要

(1) 高江校創立百周年期成会事業経過.....162
(2) 事業計画、予算書、収支決算の概要.....167
(3) 期成会会則.....169
(4) 受賞者ご芳名.....172
(5) 期成会役員名簿.....173

第五章　学校のあゆみ

(1) 沿革誌.....176
(2) 歴代校長.....186
(3) 歴代ＰＴＡ会長.....189
(4) 高江小中学校剣道部10周年記念誌.....191

第六章　回想録

・回想録……214
1　歴代校長
2　歴代教員
3　卒業生

第七章　児童生徒の百周年作品

(1)　小学生の部……226
(2)　中学生の部……234

第八章　座談会

(1)　70歳以上の部……238
(2)　70歳未満の部……246

第九章　寄付者名簿

・寄付者名簿……256

第十章　資料

(1)　高江集落概要図……262
(2)　高江区史……269

編集後記

表紙題字：比嘉良昭

発刊のことば

期成会会長　比嘉良昭

高江小学校創立百周年の節目の年を迎え、記念事業の一環として、本校の百年の歴史を振り返って、記念誌として発行することになりました。

本校は、明治41年に川田尋常小学校の分教場として小浜の上の台地に設立され、明示45年に新川の谷間の川沿いに移転し、昭和19年に高江国民学校として独立校になりましたが、翌年の昭和20年には戦争のため休校になり、戦後は捕虜収容先から帰郷した地域の人々の努力によって他の地域の学校に7ヶ月遅れて学校が再開されました。

本校は、陸の孤島、辺鄙な僻地の小さな学校として恵まれない教育環境の中で学校教育が営まれました。

明治、大正、昭和そして平成と激動する時代の変遷の中、先人たちは、1区1校で財政的にも厳しい条件下で幾多の困難を克服して、子弟の教官に「夢」を託して本校の教育の充実に尽力され「蛍雪百年」の節目の年を迎えることができました。そのご苦労と業績をたたえ記録に残して後世に伝えることは意義深いものと思われます。本校の教育に携われた多くの方々への感謝の意を表したい。

編集するに際しては、創立以来の学校沿革、卒業名簿等関係資料が少なく、昭和20年（戦前）以前については、同窓生、関係機関からの聞き取りや写真等の関係資料のご提供のご協力を得て本校の教育の変遷を不十分ながらもまとめることができました。

本誌に、玉稿を寄せられた方々、座談会へ参加された方々、写真や資料をご提供された多くの方々に厚くお礼申し上げます。

この記念誌が、同窓生をはじめ、本校に関られた多くの方々の心の絆となる事を願い、本校の更なる発展を祈念して発刊のことばといたします。

第一章

—創立百周年記念行事—

■　式　辞

東村高江小学校
学校長　　宮原　信也

本日ここに、高江小学校創立１００周年記念式典を挙行するにあたり、沖縄県教育委員会教育長仲村守和様、東村村長伊集盛久様、東村教育委員会教育長吉本健夫はじめ多数のご来賓並びに・同窓生・地域の方々等の関係各位のご臨席のもと、このように盛大に挙行できますことを、感謝申し上げ皆さんと共に祝いたいと思います。

本校は明治４１年（１９０８年）に川田尋常小学校分校として小浜の上に設立、以来集落の移動や険しい地形のため二度の学校敷地移転を余儀なくされる中、輝かしい校風と伝統を樹立し継承して参りました。なかでも、剣道においては１５年間も国頭地区小学校・中学校で常にトップを争う学校に輝き、しかも文武両道の学校と言われたのは有名です。卒業生は、昭和１９年以来でも３０２人を数え幾多のすばらしい人材を輩出し、今なお多くの同窓生が県内外で活躍しております。これらの事は私たちの誇りでもあり、子供達にも伝えていきたいと考えています。

今、子ども達は文化面・スポーツ面での活躍もめざましく、県の緑化コンクールでの準特選、税の作文における学校賞、県ロボットコンテストにおけるアイディア賞で九州派遣獲得、地区英語弁論大会３位等多くの大会での入賞があります。また、今回の１００周年の取組に対しては小学生の話し合い活動で「校舎の壁に記念になる手形や絵を書こう」「お客さんが見えるので校内を綺麗にしよう」等自分達で決め自主的に活動中です。中学生では「昔の高江区の暮らしや学校について調べ発表し合う」「グランドゴルフでお年寄りと交流を図る」等、１００周年を祝う年に在学する意義をかみしめています。これらの取組で学校の歴史や先輩たちの活躍を学ぶことで、これからの高江の未来を創造し、母校や故郷を誇りに思い、自信と勇気を持って未来に羽ばたいていけるものと期待します。

さて、このたび、記念事業として、学校発祥地である小浜の上と、本校正門に記念石碑を建立しました。本校の石碑には、どんな時でも「夢」をもって頑張り続けて欲しいとの意味で「夢」の文字を入魂しました。また、校内外の教育環境の整備、学校車の購入、書庫の建設、テント購入、記念誌作成などが推進されてきました。このすばらしい環境の下で学習できるこれからのこどもたちは、幸せだと確信しております。

このように、本事業に直接ご尽力されました期成会長はじめ期成会員の皆さん、歴代の学校長・教職員・歴代ＰＴＡ会長、ご父母や高江区民、郷友会・同窓生の方々や村当局から物心両面、多大なご協力を賜りましたことに対しまして、重ねて感謝お礼を申し上げます。

結びになりましたが、本校の限りない発展と、皆様のご健勝を祈念申し上げ式辞といたします。

■　期成会会長あいさつ

期成会会長　　比嘉　良昭

本日の、高江小学校創立百周年記念式典に、県教育長仲村様、東村村長伊集様村議会議長安和様、村教育長吉本様のご臨席をいただき、同窓生、ＰＴＡ会員及び有志各位のご参列のもとに、このように盛大に式典が挙行されますことは誠に喜びであり感謝申し上げます。

さて、本校は、明治41年に小浜の上の台地に川田尋常小学校の分教場として設立されました。そして、５年後の明治45年に新川の谷間の川沿いに移転し、昭和19年に高江国民学校として独立校になりました。しかし、残念にも、翌年の昭和20年３月には、戦争のため自然休校となりました。

戦後は、荒廃した村に、捕虜で収容されていた国頭村や大宜味村から里帰りした一部の住民は、厳しい生活の中で掘っ建て茅葺きの校舎をつくり、村当局のご配慮によって、他の地域に７ヵ月遅れて昭和21年の５月に学校が再開されました。

本校は、陸の孤島の辺鄙な山間僻地の小さな学校として、今日では想像もできない程の厳しい学校環境でありましたが、歴代校長はじめ本校に在職された教職員はもとより村当局、父母や地域の人々が一体となって幾多の困難を克服して教育の充実に尽力されました。

そして、時代の流れ、社会の進展、地域の人々の要望によって、昭和44年に教育条件の良い現在の地に移転し、小規模の学校として特色ある教育活動が行われるようになりました。

本校が、幾多の変遷を経て百周年を迎えることができましたのも、先人たちの本校に対する深い思いと、本校の教育に携わられた多くの皆さんのご功労の賜であり感謝にたえません。

本校で育まれた卒業生も３00余名になり、社会に有為な人材として多方面で活躍しています。

この意義深い創立百周年の節目に、期成会は記念事業として、学校車の購入学校発祥地の石碑、百周年記念碑の建立、記念式典、祝賀会、記念誌の発行を取り組んできました。この事業の推進に当たって、郷友会の稲福会長はじめ会員、同窓生皆様の母校愛により絶大なるご協力ありがとうございました。さらに本事業への趣旨をご理解くださいました本校に在職された教職員をはじめ多くの方々から物心両面からのご芳志をいただきました。衷心より深く感謝申し上げます。

この度の、百周年の節目の行事を契機に、本校への思いを一層深められることを願い、本校が未来永劫に発展することを祈念し期成会を代表してのごあいさつといたします。

■　百周年児童あいさつ

児童会長　　石原　鈴也

先輩方、そして地域のみなさまにささえられ、高江小学校は、今年１００周年をむかえることができました。

高江校は今から、１００年前の、明治４１年に川田尋常小学校の分校として小浜の上に設置されました。それから４年後、明治４５年には現在地である新川へ移転されました。当時は、児童生徒が小学生７０人、中学生３３人という時もあったそうです。また、そのころの学校生活は、生徒がまきを３本ずつ持ってきてそのまきで給食を作ったり、水道がないので学校の近くの井戸から水をくんだりと今とは少し変わっていたようです。校舎はどうだったかというと戦後まもなくは、かやぶきの校舎でした。それが今では、急速な社会発展とともに鉄筋コンクリートの校舎になっています。

僕は、たくさんの花や緑に囲まれ、このりっぱな校舎にも守られながら、勉強やスポーツを頑張っています。４５分の休み時間では、全児童一緒にキックベースやトランプなどをして、仲良く遊んでいます。

１００周年という記念の年に、何か僕たちにできることはないかと思い、小学生みんなで話し合い活動の時間に何をするか話し合いました。そこで、学校のかべに絵を描くことに決まりました。計画を立てて,進めているところですみなさん、完成を楽しみにしていて下さい。

今、僕たちが、こうして１００周年をむかえることができるのは、教育委員会のみなさま、期成会のみなさま、地域のみなさま、ＰＴＡ役員の方々が高江のすばらしい学校づくりに協力してくださったからです。本当にありがとうございました。この感謝の気持ちを胸に、これからも、僕たちが高江校の良さである、異年齢のたてつながりを、もっともっと強くしながら、頑張っていきたいです。

■　祝　辞

沖縄県教育委員会
教育長　　仲村　守和

東村立高江小学校創立１００周年記念式典にあたり、お祝いの言葉を申し上げます。

本校は、明治４１年に川田尋常小学校高江分校として創立されました。以後昭和４７年に高江小学校となり、現在に至っております。

これまでの歴代の校長をはじめ、諸先生方の教育に寄せる誠実さと情愛の心は、子ども達の健やかな成長として実を結び、多くの卒業生を送り出しています。その中には、戦前、戦後を通じて、政界、財界、教育界などさまざまな分野で活躍している方々が数多くいらっしゃいます。

１世紀という長い期間において、地域に根ざした教育実践を継続している本校は、環境モデル校、全国へき地教育研究大会での実践発表をはじめ、剣道で県・九州レベルで活躍するなど、めざましい成果をあげられています。

このように、本校が学校教育としての歴史を着実に刻んでこられたのは、歴代の校長、諸先生方の御尽力もさることながら、東村当局、並びに東村教育委員会をはじめ、ＰＴＡや地域の方々の学校教育に対する御理解があったからに他なりません。教育行政を預かる者として、改めて衷心より敬意を表しますとともに、感謝申し上げます。

さて、一口に１００年と申しますが、本校は創立以来さまざまな変遷を遂げて今日に至っております。顧みますと、本校の教育の歴史は、地域とのつながりの歴史そのものであったといっても過言ではありません。これからの学校教育は、学校、家庭、地域との密接な連携・協力による学校づくりが強く求められます。本校の地域の人材を生かした教育は、まさに地域に開かれた学校づくりの先駆けとして、今後の学校教育の在り方に大きな示唆を与えてくれるものと確信しております。

本校は創立１００周年という大きな節目を迎え、学校教育目標を「たくましい元気な子　かんがえのしっかした子　えがおで心豊かな子」として掲げ、子ども一人一人の個性を重視し、変化の激しい社会に主体的に対応できる児童の育成に努めております。また、豊かな自然環境と地域との関わりを本校の特色としていることから、豊かな人間性と社会性をはぐくむことにより、「自ら学び、考え、実践し、たくましく生きる心豊かな高江っ子」を、なお一層推進していただきますようお願い申し上げます。

結びに、記念事業を推進してこられました記念事業期成会の皆様のご苦労に心から感謝を申し上げますとともに、高江小学校の児童の健やかな成長と、学校ＰＴＡ及び地域の皆様方の益々の御飛躍と御発展を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

■　祝　辞

東村長　　伊集　盛久

この度、東村立高江小学校が創立１００周年を迎えられたことに対し、ご臨席の皆様と共に心からお祝い申し上げます。

本校は、明治４１年に川田尋常小学校高江分校として小浜の上に開校したのでありますが、明治４５年に上新川へ移転し、昭和１９年に東国民学校からの分離独立し高江国民学校になりました。その後昭和２１年に高江初等学校として開校し、昭和２７年に石造り校舎１棟２教室が建築され、徐々に生活環境の改善が図られる中、昭和４４年に現在の場所に位置を換え、校舎・体育館・運動場・プール等の施設整備の充実を図りながら今日にいたっております。

創立以来１世紀にわたって公的教育機関として、地域の初等教育の振興発展に重要な役割を果たして参りました。

今日まで輩出された卒業生は３００名余に及び、各界において活躍している数多くの優れた人材を社会に送り出し、輝かしい実績と伝統を築いかれたことは、誠に喜びにたえない次第であります。

又、開校以来今日まで、激動する時代を切り開き、初等教育の場として十二分に役割を果たして参りました。特に、去る大戦によって壊滅的であった校舎やその他の教育基盤を、先生方や地域の方が力を併せいち早く再建し、これまで一環して教育施設及び教育環境設備に努力され、名実共に教育の場として今日の隆盛をみたのであります。

これも偏に歴代の校長先生をはじめ諸先生方の教育に対する情熱と、本校発展のためにご支援下さった父兄や地域の方々の理解と協力の賜物であり、衷心より深く敬意を表します。

教育は国家１００年の大計と申します。１世紀にわたる本校の輝かしい伝統と歴史は、正にそれを物語るものであります。

１００周年を契機として、関係各位が教育の使命と重要性に対する認識を深められ、将来を担う子弟の教育に一層のご活躍を期待申し上げます。

我が国の教育は世界でも最も高い水準にありますが、これは国民の教育に対するたゆまざる努力があったから成し得たものと思います。

本校の輝かしい伝統と実績も先輩方の１００年に及ぶ努力等によって打ち立てられたものであり、この伝統を後輩が受けついでさらに発展させてくれるものと信じています。

終わりに、本校の益々のご発展と関係各位のご健勝をご祈念申し上げ祝辞といたします。

■　祝　辞

東村教育委員会
教育長　　吉本　健夫

本日、東村立高江小学校の創立１００周年記念式典が挙行されるにあたり、心よりお祝いのご挨拶を申し上げます。

本校は、明治４１年川田尋常小学校の高江分教場として、「緑の山脈水清く太平洋の風かおる東の空に」と校歌に歌われているように朝陽を仰ぐ小浜の上に高江地域住民待望の教育施設が設置され、「深山路　教え草咲く　御代の春」と当時の喜びを表しています。時代の移り変わりとともに、校名の改称・校地の移転や校舎の改築・社会情勢・教育制度等幾多の変遷を重ねてまいりましたが、その都度歴代校長先生はじめ本校に歴任された教職員各位・ご父母や地域ＰＴＡの皆さんのご理解、協力体制で本校を力強く支えて下さったおかげで児童生徒が伸び伸びとたのしく学校生活を送ることができていますことと、本村はもとより県内外に多くの人材を送り出してきましたことに衷心より敬意と感謝を表します。

本校では、本土復帰前は複複式学級の編成も余儀なくされ、過酷な状況下での授業もありました。現在は完全複式学級が常態化しておりますが、近年「歯・口の健康に関する画像ポスターコンクール」で全国最優秀賞を・教育版画や画像コンクールで県知事賞を受賞。

剣道では国頭地区や県大会で優勝し九州大会・全国大会に出場するなどの活躍は、まさに文武両道すばらしい教育活動を展開し、児童生徒も輝いています。

児童生徒の努力は言うまでもなく、校長先生はじめ教職員・父母・地域が一丸となって導いて下さった賜物と深く感謝いたします。また、本校は平成１０年１１年の２年度に亘り、文化科学省からへき地教育研究指定を受け「自ら主体的に取り組む児童生徒の育成」「自ら学ぶ力を育てる学習指導の工夫」の研究主題を基に研究授業に取り組み、その成果を平成１２年度全国へき地教育研究大会　沖縄大会で発表し高い評価を受けました。「教育にへき地は造らない」から「本当の教育はへき地から」を合言葉に、心身ともに健康で豊かな情操と自主性・創造性・国際性豊かな人材育成に努めていることは大変素晴らしく、本県へき地教育の手本となっております。創立１００周年を契機に、２１世紀を担う子ども達が世界の恒久平和を発信しつつ、高江校から大きく羽ばたいていくことを、切に希望するものであります。

末尾になりましたが、本日立派な式典及び記念事業を遂行されました１００周年記念事業期成会の皆様ならびに高江校職員各位はじめご父母や地域ＰＴＡの皆さんはもとより、ご協力くださいました皆様方々に深く敬意を表し、高江小学校の限りないご発展を祈念申し上げ、お祝いの言葉と致します。

記念事業の経過
平成１９年８月１３日
立て看設置

平成２０年１月３０日
チャリティーゴルフ大会

平成２０年８月２３日
座談会

平成２０年１１月１４日
神ウガン

平成２０年１１月１７日
記念碑除幕式

平成２０年１２月１０日
寄贈学校車納車

第3種郵便物認可

「夢の実現を」OB激励

創立100周年記念碑の設置を喜ぶ高江区民ら＝東村・高江小中学校

東村・高江小 創立100周年石碑を除幕

【東】村高江区の高江小中学校（宮原信也校長）で十七日、同小学校の創立百周年を記念した石碑の除幕式が行われた。期成会、郷友会、区民ら約七十人が出席、在校生らが校歌斉唱で祝った。それに先だち、同区の小浜の上では、同校発祥の地記念碑の除幕式も行われた。

23日に記念式典

同校は一九〇八年（明治四十一年）に、小浜の上と呼ばれる集落に川田尋常小学校高江分校として設立された。同地には現在は住宅はない。その後、一二年に新川へ、六九年に現在地へ移設された。

記録が残っている四四年以降の卒業生は三百二人だという。

除幕式で宮原校長は「かつては、舗装された道もない厳しい環境の中で教育が行われていた。多くの先輩たちの苦労が詰まった百年だ」とあいさつした。

近くを流れる新川川流域から運ばれた石で作った百周年記念碑には、「夢」と「銀雪百年」の書が彫り込まれている。

期成会（比嘉良昭会長）が同校の明るい未来と、百年の歴史をイメージして選んだ。

書を書いた比嘉会長（74）は、獣道が通学路だった当時の様子を振り返りながら、「夢には、寝て見る夢と、起きて見る夢がある。ぜひ起きて見た夢を実現してほしい」と在校生に呼びかけた。

生徒会長の石原宙命君（三年生）は「くじけそ

高江小学校発祥の地・小浜の上に設置された記念碑＝東村高江・小浜の上

提供　沖縄タイムス社

記念式典・祝賀会
スナップ

祝 高江小学校 創百周年記念式典・祝賀会
心・技・体
教育目標
創造・情操・鍛錬

百周年記念式典

高江小中学校

なつかしき日々の同窓

創造・情操・鍛錬

立百周年記念式典・祝賀会

式典・祝賀会

祝高江小学校創立百周年記念式典・祝賀会

百周年記念式典プログラム

1．開式のことば …… 教頭　神谷順治
2．校歌斉唱
3．経過報告 …… 教頭　神谷順治
4．式辞 …… 学校長　宮原信也
5．期成会長 …… 期成会会長　比嘉良昭
6．祝辞 …… 沖縄県教育委員会教育長　仲村守和
東村長　伊集盛久
東村教育委員会教育長　吉本健夫
7．児童会長あいさつ …… 児童会長　石原鈴也
8．記念品目録贈呈
9．感謝状贈呈
10．受賞者代表あいさつ …… 第20代校長　仲地末子
11．祝電披露
12．閉式のことば …… ＰＴＡ会長　安次嶺現達

写真提供　比嘉剛

祝賀会

心・技・体

創立百周年記念式典・祝賀

心・技・体

祝賀会プログラム

1.	開式のことば	期成会総務部長　西銘晃
2.	幕開け	仲村一史、他
3.	かぎやで風	仲地ツル子、崎間邦枝
4.	乾杯	東村議会議長　安和敏幸
5.	郷友会会長挨拶	郷友会会長　稲福可栄
6.	余興	高江小学校児童 高江中学校児童 高江区婦人会
7.	区長挨拶	高江区長　仲嶺武夫
8.	余興	郷友会
9.	万歳三唱	郷友会副会長　高江洲義賢
10.	閉式のことば	期成会副会長　高江洲義吉

第五章

―学校の歩み―

学校沿革誌

１９００年（明治３３）

平良尋常小学校の就学率が低くなっているのは、高江村からの通学が困難で（学校がない時期）あるからである。高江では平良校に通学可能な村落や与那原・泡瀬・具志川などの縁故者の家に下宿して就学せざるを得なかった。高江村では就学を望んでもその実現は容易なことではなかった。（東小百周年記念誌より）

１９０８年（明治４１）

（初代教員）宮城長太郎・岸本ツル

川田尋常小学校高江分校として小浜の上に設立される。小学校尋常科（四年生）が義務化された１８８６年から２２年経てからである。これまでは、平良校や与那原・泡瀬・具志川などの縁故者の家に下宿して就学せざるを得なかった。このように、高江区民の就学にかかる苦悩は深刻なものであった。分教場設置に対する高江区民の喜びがいかに大きかったかは次の句からも伺える。

「深山路や　教え草咲く　御代の春」

「君が代や深山奥にも　教え草」

創設された高江分教場に、初代教員として宮城長太郎、岸本ツルが赴任した。

１９１２年（明治４５）

学校を小浜の上より上新川へ移転する。
新川から小浜の上の分教場に通学するには、新川川を徒歩で渡らなければならなかった。降雨時には新川川が増水し、川を渡って通学するには危険が多く、川にロープを張り渡して、それにつかまって川を渡り通学していた。

１９４１年（昭和１６）

高江分教場に高等科が併設され、これで高江区民が義務教育六年、高等科二年の普通教育を受けられるようになった。

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
	宮城正昌	1940年		
	宮城ヨシ	(昭和15)		
	比嘉利男	1942年		
	本永昌保	1943年		
	本永エミ	(昭和18)		
	今井泰子			
	仲地淳子			
初代　校長	大城栄俊	1944年		・12月23日：東国民学校より分離独立して高江国民学校として
2代　校長	玉城幸男	1946年		独立した。
	照屋節	(昭和21)		・戦争で部落や学校は米軍によって焼き払われてしまった。
	久高フジ			
	池原絹子			・高江校の開校は他の学校より7ヶ月遅れた。
	高江洲義盛			・高江初等学校として5月6日開校。
3代　校長	松田建徳	1947年		高江中学校は初等学校に併置された。
	久高弘靖	(昭和22)		

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
	松田ヒデ	1948年		
	今井克己	(昭和23)		
	長嶺春明			
	西銘清吉			
4代　校長	宮城政忠	1949年		
	比嘉恵子	(昭和24)		
	久高春子			
	久高浩幸			
	親泊正行			
	幸本正夫			
	大宜味直正			
	比嘉恵子	1951年		・11月1日：校長発令
	知念タケ	(昭和26)		
5代　校長	知念森正	1952年		・4月24日：石造り校舎１棟2教室が落成。
	徳村悦子	(昭和27)		
	崎浜静男			
	平良初子			
	前田道弘			
	浦崎直文			
	山城清			
	又吉静子			
	宮良敏子			
	池原幸男			・校長住宅落成(PTAの自力により)
6代　校長	知念高信	1957年		・ブロック校舎1棟2教室落成
	知花芳子	(昭和32)		・教員が1人減となったので字の自力で助教諭・宮城弘安を
	浦崎直文			雇う
7代　校長	宮城剛信	1958年	小　55人	・字民労務提供、124人(可労者2日平均)
教諭	宮城弘安	(昭和33)	中　10人	・ドル切り替え行われる。
教諭	伊地昭子			・学芸会挙行
教諭	比嘉千代子			
教諭	比嘉良昭	1959年	小　60人	・中学生国頭一週旅行に。　・パン給食はじまる。
		(昭和34)	中　10人	・営林署の職員官舎を学校施設として払い下げを受ける。 ・シャーロット台風本島を襲う、車部落で地滑り発生、４軒埋没。 ・石造り校舎土砂浸入雨漏りで備品の被害大なり。
中学教諭	平良満	1960年	小　63人	・琉球政府主席大田政作氏高江訪問。
小学教諭	金城洋子	(昭和35)	中　15人	・バス終点の魚と牛道間バス時間に合わせてジープの定期運行開始 ・大泊、車の児童生徒、本日よりトラックで登校する。

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
小学教諭	稲福吉昭	1961年	小　71人	・大田行政主席高江校視察を行う。
〃	金城順一	(昭和36)	中　20人	バレーボール隣校親善試合、安田小中学校において行う。
				・元日、はじめて国旗掲揚が許される。
小学教諭	島袋正子	1962年	小　73人	・辺土名地区中学校球技大会に男女が参加。
中学教諭	宮城茂子	(昭和37)	中　22人	
補	喜納愛子			
中学教諭	棚原武夫	1963年	小　69人	・公衆電話架設される。
小学教諭	平良悦子	(昭和38)	中　26人	琉球政府行政主席太田政作氏来校。
〃	安村弘			
8代　校長	渡久地甚栄			
中学教諭	宜保文雄	1964年	小　66人	・アメリカ政府よりダージー台寄贈あり。
小学教諭	仲松弥栄	(昭和39)	中　29人	中学2、3年生　2泊3日の那覇・中部方面修学旅行へ。
中学教諭	渡嘉敷順治			・キャンプハンセン(金武)よりシーツ、ブランコ寄贈。
小学教諭	大城清子			・元本校教諭崎浜静男氏より学芸会用幕の寄贈あり。
〃	当間秋子	1965年		・喜屋武盛栄氏より金子六拾弗也御寄付あり。
中学教諭	真喜屋洋子	(昭和40)		・高江マリン隊より学用品の寄贈あり。
補	安里良子	1966年	小　67人	・PTA会長浦崎直政へ感謝状贈呈、新会長伊地兼興氏等役員
小学教諭	宮城親孝	(昭和41)	中　30人	の激励会。
事務職員	親泊康明			・創立60周年記念碑の除幕式並びに備品贈呈式を挙行する。
				記念碑、校旗、(高江郷友会より) 天幕(喜屋武盛栄氏より)
9代　校長	平識善福	1967年	小　64人	学芸会用前幕(川田区在住の同窓生より)
中学教諭	玉城勝郎	(昭和42)	中　31人	・校地移転について促進委員会を結成する。(嘉手刈区長、
〃	上原賢三郎			浦崎村議、佐久本、浦崎PTA正副会長、平識校長)
小学教諭	中村初子			・琉球大学長池原貞雄氏来校。
〃	宜保多美子			・牛道の新敷地において地鎮祭が挙行された。
中学教諭	牧志宗助	1968年	小　53人	・保育体育科主事　玉城幸男主事、グランド設計の為来校。
〃	松田吉弘	(昭和43)	中　35人	辺土名地区中体連排球で女子がベスト4。
〃	平田洋子			・東京、沖縄学徒後援会の寄付金によりワイヤーレスアンプ
〃	玉城武上			一式を購入。
小学教諭	上原晴子			・高江洲義貞氏よりプレイホーン33台寄贈される。
事務職員	崎間善政			・前年に着工された新校舎の地ならし工事が完了。
小学教諭	仲本吉雄	1969年	小　39人	・新校舎建築工事が完了し、旧校地の新川より移転した。
中学教諭	山城直三	(昭和44)	中　29人	校舎打ち込み作業で全可労者、学校全職員徹夜で行う。
〃	新城康子			・本校同窓会結成準備会を普天間において開かれる。
				・旧校舎の閉鎖式、新校舎において移転式典を盛大に行う。

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
10代　校長	上江洲朝真	1970年	小　30人	・校歌が制定される。作詞・吉川安一、作曲・田場盛徳
中学教諭	運天和夫		中　27人	・本校校舎移転一周年記念展示会。
				・植樹用梯梧五十本：コザ喜屋武盛輝氏外より寄贈。
中学教諭	島袋義久	1971年	小　30人	・沖縄子どもを守る会より伊波良子（中3）、佐久本盛栄氏
〃	宮城弘典	（昭和46）	中　22人	（区長）が表彰される。
小学教諭	島袋好子			・川島勲氏より桜八十本寄贈、校舎周辺に植付け。
中学教諭	島袋秀信	1972年	小　21人	・本土復帰、通貨交換。
〃	金城涼子	（昭和47）	中　23人	・校名を沖縄県東村立高江小学校、中学校と改名。
小学教諭	金城真佐子			・台風7号被害による校舎一部、運動場スタンド倒壊。
				・県子どもを守る会より高江洲義彦（中3）表彰を受ける。
11代　校長	富原正義	1973年	小　19人	・県Ｐ連合会より嘉手刈真昭氏が（県功労賞）を受ける。
中学教諭	小浜秀勝	（昭和48）	中　18人	・新川診療所開所式。
〃	比嘉宗幸			・村内中学校バレーボール大会で男子が優勝。
				・校地拡張工事埋め立て作業開始。
中学教諭	金城義才	1974年	小　18人	
小学教諭	松田朝子	（昭和49）	中　17人	・地区新人卓球大会男子一勝す。
中学教諭	島袋秀信			・複々式学級が改組され、複式学級編成となった。
				・秋の遠足　中2以下は伊江島、中3修学旅行は久米島。
小学教諭	玉木義勝	1975年	小　20人	
中学教諭	有銘弘	（昭和50）	中　13人	・遠足大泊海岸へ。
〃	嘉数登			・本土への修学旅行（中学生13人）
				・校舎合宿研修会（児童・生徒）
中学教諭	喜納政恭	1976年	小　17人	
〃	平良昌行	（昭和51）	中　13人	・春の遠足（イノガマ海岸）
〃	知念達子			・ＰＴＡ植樹作業。
小学教諭	有銘操子			・水泳教室（川田プール）
中学教諭	宜志政市			・家庭科、普通教室が落成した。
小学教諭	宮城由紀子			・スケート場開き（名護生コン　比嘉進氏よりの寄贈）
〃	多和田真光			・秋の遠足（辺戸岬へ小学1年より全員参加）
12代　校長	友寄隆治	1977年	小　12人	
教頭	伊是名正和	（昭和52）	中　12人	・プール竣工引渡し、村内初めてのプール建設となった。
中学教諭	比嘉敏夫			
〃	島袋晃			・小学校5・6年生修学旅行（1泊2日）
小学教諭	友寄清子			・県読書感想文で崎間美香さん、感想画で糸洲辰也君が
養護教員	吉本敬子			優秀賞を受賞。

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
中学教諭	玉城一夫	1978年	小　11人	・中学校九州地方へ修学旅行。
〃	宮平博旦	(昭和53)	中　11人	・中体連バレー宮古大会に港川正君が出場。
小学教諭	伊良波美枝子			・創立70周年記念式典、記念庭園、記念築山。
				・西日本新聞社主催読書感想画コンクールにおいて努力賞校を受賞。(中学)
中学教諭	中村博	1979年	小　11人	・移動学習、青年の家にて全校生徒が参加。
〃	金城涼子	(昭和54)	中　8人	・国際児童年の前夜祭でクンジャンサバクイを演ずる。
小学教諭	中村春子			・体育館備品より出火、5分の3が焼失、原因不明。
〃	小浜守清			・県の学校花園コンクールで優良学校花園賞を受賞。
養護教員	照屋智子	1980年	小　8人	・校内水泳大会を実施。
教頭	翁長盛喜	(昭和55)	中　7人	・父兄を対象にした焼き物教室を実施。
小学教諭	興那嶺登美子			・村内童話お話し大会で高江洲ひとみさんが村代表に選ばれる。
13代　校長	比嘉彰	1981年	小　7人	・体育館竣工。
中学教諭	知花博康	(昭和56)	中　6人	・村内児童お話大会し(村代表に)仲嶺真人、崎間美香
〃	大城学			・県読書文、画(優秀賞)　高江洲悟、津波古和子
小学教諭	玉城孝子			(優良賞)　高江洲実、山田京子
中学　補	大城なるみ			
〃	西銘美恵子			
中学教諭	上地道枝	1982年	小　6人	・体育館竣工。
〃	宮城末子	(昭和57)	中　6人	・地区童話大会で高江洲淳君(小5)が(最優秀賞)県大会に出場。
〃	新垣正徳			
司書	大嶺紺代	1983年	小　11人	・県交通安全ポスター(優秀賞)　高江洲美香
小学教諭	仲村一史	(昭和58)	中　5人	(優良賞)　高江洲直美、島袋亮
〃	山城ツル子			・県童話大会に高江洲淳君、お話しに崎間美香さんが参加。
教頭	新城平高			・名護祭り剣道大会、小学校(優勝)　高江洲淳
中学教諭	与那城洋子			(3位)　仲嶺真文
小学教諭	島袋直二			・県学校歯科医師会より、学校として表彰された。
14代　校長	玉城肇	1984年	小　9人	・中体連剣道　個人(優勝)　高江洲直美、(3位)高江洲淳
中学教諭	前津栄位	(昭和59)	中　6人	・水難防止標語(最優秀)仲嶺麻紀、(優良賞)崎間美香
〃	比嘉時弘			・タイムス習字(優良賞)仲嶺真人、高江洲淳、図画(優良賞)仲村あや、仲嶺正代
〃	金城美智子			
補	荻堂公子			・童話お話し(地区代表に)仲嶺正代、仲嶺真人、高江洲淳崎間美香
〃	平良みどり			
養護教員	宮平恵利子			・新報書初め(金賞)　高江洲将行、(銀賞)津波古栄、仲嶺麻紀、崎間美香
用務職員	渡久地芳			
給食職員	崎間邦枝			

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
事務職員	松田恵理子	1985年	小　11人	・地区中体連剣道団体男子(優勝)、県大会個人(準優勝)
中学教諭	金城邦夫	(昭和60)	中　5人	高江洲淳(九州大会へ)
〃	西銘美恵子			・地区陸上2年走高(2位)高江洲淳、共通800M(6位)　仲嶺
〃	長田肇			真文
小学教諭	喜屋武常子			・県交通安全ポスター(最優秀賞)島袋亮、仲嶺真人、(優良
〃	我喜屋宗雄			賞)　山田永政、高江洲将行
〃	新垣清治			・地区新人剣道団体(2位)、個人　(優勝)仲嶺真文
給食職員	山田智子			・新報書初展、(銀賞)　具志堅麗奈、仲嶺正代、津波古栄
				、高江洲淳
中学教諭	平　好正	1986年	小　11人	・中体連剣道男子団体(準優勝)、高江洲淳君は九州大会出
〃	金城喜代子	(昭和61)	中　5人	場。
教頭	玉城一夫			・地区陸上走高跳び(1位)高江洲淳、1500M(2位)、800M(8
小学教諭	宮城直子			位)仲嶺真文
				・地区童話お話し大会(村代表に)高江洲淳、高江洲将行
				・中体連新人剣道個人の部(優勝)仲嶺真文
				・新報書初展(金賞)　具志堅麗奈、仲嶺正代、高江洲淳、(
				銀賞)　山田英雄、具志堅正平、津波古さかえ、仲嶺真人、
				仲嶺真文
15代　校長	渡久地正義	1987年	小　11人	・地区中体連剣道、個人(優勝)仲嶺麻紀、仲嶺真人、(3位)
中学教諭	阿嘉洋美	(昭和62)	中　4人	島袋亮
養護教員	古波津桂子			・沖縄タイムス展図画　(優良賞)松田あすか、書道　(優良
司書	大嶺絹代			賞)仲嶺正代
給食職員	具志堅律子			・地区科学展　(最優秀賞)仲嶺麻紀、島袋亮、高江洲義春
				・村童話お話し大会(村代表に)高江洲将行、仲嶺麻紀
				・県科学作品展(教育長賞)島袋亮、仲嶺麻紀、高江洲義春
				・全沖書展(金)渡久地絵美、西銘いち子、(銀)松田あすか
				渡久地真優子、高江洲将行、仲嶺正代、具志堅麗奈、仲嶺
				真人、仲嶺麻紀
教頭	高江洲盛一	1988年	小　11人	・母の日作文(特賞)　松田あすか、渡久地絵美
中学教諭	崎浜秀宜	(昭和63)	中　3人	・県中体連剣道個人(優勝)　仲嶺麻紀、代表で九州大会へ
〃	金城徳子			・タイムスコンクール図画　(優秀)石井裕也、西銘いち子
小学教諭	寺田光枝			、高江洲祐介、渡久地絵美、松田あすか
〃	屋良節子			・地区童話お話し大会(村代表に)渡久地絵美、仲嶺正代、
〃	与那登安			仲嶺麻紀
				・県感想文画(優秀)西銘いち子、石井裕也、高江洲祐介、
				具志堅麗奈
				・中体連新人剣道大会　個人(優勝)仲嶺麻紀
				・全沖書書初め(金賞)渡久地絵美、仲嶺正代、仲嶺麻紀
16代　校長	金城秀和	1989年	小　11人	・地区中体連剣道女子団体(優勝)、個人(優勝)仲嶺麻紀、
中学教諭	大城民子	(平1)	中　4人	(準優勝)仲嶺正代

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
中学教諭 補 小学教諭	宮城孟栄 新地康秀 久高敏子			・地区英語スピーチコンテスト（優勝）仲嶺麻紀、県で（3位） ・交通安全ポスターコンクール（優秀賞）崎間格 ・新報感想文画コンクール（優秀賞）高江洲祐介、渡久地絵美 ・地区新人剣道個人（優勝）仲嶺正代 ・全沖書初め（特選）渡久地絵美、西銘いち子、高江洲祐介 ・北部読書文画（優秀賞）松田あすか、高江洲祐介、西銘いち子、渡久地絵美
養護教員 補 〃 〃	田中喜子 金城美紀 比嘉和美 与那嶺あさみ	1990年 （平成2）	小　14人 中　7人	・地区中体連剣道女子団体（3位）個人（優勝）仲嶺正代、（2位）具志堅麗奈 ・県中体連剣道女子個人（優勝）仲嶺正代　九州大会へ。 ・地区感想文感想画（優秀賞）渡久地絵美、西銘いち子 ・地区新人剣道個人（優勝）仲嶺正代、高江洲将行、（2位）具志堅麗奈
教頭 中学教諭 〃 〃 補 小学教諭 〃 〃 〃	棚原武夫 山口栄三 知花正宏 銘刈満 平得穂子 仲村志郎 山城祐市 玉城美和子 平田和美	1991年 （平成3）	小　18人 中　8人	・地区中体連剣道団体女子（準優勝）、個人（優勝）仲嶺正代（2位）具志堅麗奈、男子個人（2位）高江洲将行 ・地区英語ストーリーコンテスト（1位）仲嶺正代 ・高江剣道部10周年記念式典 ・仲嶺正代：九州剣道大会ベスト8、全国大会ベスト16。 地区読書感想文画（優秀賞）仲嶺正代、（優良賞）高山絵里、具志堅麗奈 ・地区新人剣道団体女子（優勝）、個人（優勝）具志堅麗奈、（準優勝）高江洲将行、渡久地真優子 ・新報書初め（銀賞）具志堅正平、仲嶺正代
中学教諭 〃 小学教諭 補 〃 司書 事務職員 給食職員	吉田敦 山城京子 池原三致子 金城美紀 大城恵利子 比嘉鶴見 肥後百合子 比嘉律子	1992年 （平成4）	小　17人 中　10人	・県教育版画コンクール（特選）具志堅正平 ・地区中体連剣道団体女子（優勝）、個人（1位）具志堅麗奈、（2位）渡久地真優子、（3位）高江洲将行、具志堅麗奈、九州大会へ。 ・地区英語ストーリー（優勝）屋良真理子、県大会へ。スピーチコンテストでも県大会出場。 ・村代表に童話（当間おりえ、池原朝章）お話し（渡久地絵美）意見発表（高江洲将行、具志堅麗奈）
第17代 校長 中学教諭 〃 補 補 養護教員	島袋啓一 宮城功 大城美智子 上原かおり 祖慶京子 喜納恵子	1993年 （平成5）	小　12人 中　11人	・地区新人剣道団体男子（準優勝）、個人（優勝）具志堅正平渡久地真優子 ・県中体連剣道団体女子（準優勝） ・地区中体連剣道団体女子（優勝）、男子（3位）、個人（優勝）真優子、具志堅正平（2位）渡久地絵美（3位）当間安奈 ・英語ストーリーコンテスト　比嘉あかね、地区代表に。 ・県中体連剣道団体女子（準優勝）、個人（ベスト4）渡久地真優子、九州大会参加。 ・西銘晃ＰＴＡ会長　県Ｐ連合並びに県剣道連盟より表彰を受ける。 英語スピーチコンテスト（2位）渡久地真優子、地区代表に。

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
				・地区新人剣道団体女子(優勝)、個人女子(準優勝)當間安奈
				個人男子(準優勝)具志堅正平
中学教諭	兼久正義	1994年	小　12人	・本校出身比嘉恵子先生(アメリカンスクール勤務)よりキ
〃	比嘉晴美	(平成6)	中　12人	ーボードの寄贈
小学教諭	宮城裕司			・地区中体連剣道団体男女(優勝)、個人(優勝)
〃	砂川武彦			・英語ストーリーコンテスト港川美奈子地区・県で(2位)
〃	上原裕子			
事務職員	崎浜美奈子			・県総体剣道個人(3位)　具志堅正平県代表で九州大会へ。
養護教員	照屋理奈			・地区陸上　男子400MR(1位)
補	崎間美香			・地区新人剣道団体女子(優勝)、個人(2位)渡久地絵美、
中学教諭	嶺井雄	1995年	小　12人	(3位)西銘いち子
〃	下里美由紀	(平成7)	中　8人	・地区中体連剣道団体女子(準優勝)、個人(優勝)渡久地絵
小学教諭	知花多鶴子			美、(3位)西銘いち子、松田あすか、県総体参加。
事務職員	中村みり子			・地区新人剣道団体男子(3位)、個人(ベスト4)石井裕也、
				崎間格　　女子(2位)島袋尚子
18代 校長	大城誠	1996年	小　10人	・学校車購入資金の募金開始、学校車車庫作り。
中学教諭	上間ひろえ	(平成8)	中　8人	・地区中体連剣道団体男子(準優勝)、個人(3位)石井裕也
養護教員	玉城勝江			
補	長田真弓			・読書感想画表彰　當間嗣利
補	前田安子			・地区新人個人(3位)石井大作、崎間格
補	長山隆子			
補	新城敬弥			
事務職員	親泊美奈子			
司書	西銘恵子			
給食職員	吉本友嘉利			
教頭	山口栄三	1997年	小　10人	・辺土名地区ミニバスケットボール大会混成の部(優勝)
中学教諭	糸数邦夫	(平成9)	中　5人	・地区新人剣道個人(優勝)石井大作
〃	前田安子			・大城誠校長より卒業式用字幕、儀式行事用校章旗の寄贈
〃	長山隆子			
〃	仲村美智子			
小学教諭	黒島実千代			
〃	国吉朝子			
〃	平良志麻子			
給食職員	稲福るび代			
19代 校長	仲里恵考	1998年	小　9人	・電源開発　吉岡所長よりビデオカメラの寄贈有り。
教頭	宮里哲徳	(平成10)	中　5人	・地区総体個人(1位)石井大作(県大会ベスト8)

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
中学教諭	宮城興一			・タイムスコンクールs区分(優良賞)松田夏紀、書道(優秀賞)伊佐歩美
〃	宮城綾乃			
小学教諭	中村美和子			・池原貞雄先生講話「これからの高江地域」
〃	我如古大志			・地区読書感想画(優秀賞)石井千尋
〃	古堅由香利			・地区新人剣道参加。
中学教諭	仲本明美	1999年	小　7人	・地区科学展個人(銅賞)伊佐歩美、高江洲大地
補	伊芸恵	(平成11)	中　6人	・地区お話し大会に松田ありさんが村代表として出場。
事務職員	阿波根東子			・地区読書感想文(優秀)伊佐歩美、画(優秀)高江洲大地、崎間竜児
補	岸本綾子			
中学教諭	岸本聡美	2000年	小　7人	・県　歯、ロポスターコンクール、(最優秀)松田夏紀(全国でも最優秀に)、(優良)盛若菜
〃	仲村渠万寿子	(平成12)	中　6人	
小学教諭	稲嶺盛久			・地区お話し大会、比嘉寛、伊佐歩美、村代表として出場
補	北島しのぶ			・県読書感想画(優良)伊佐弓弦、伊佐歩美
補	東江寿賀子			・県教育版画(特選)伊佐弓弦、松田夏紀(佳作)盛若菜、伊佐歩美
養護教員	仲宗根京子			
20代　校長	仲地末子	2001年	小　9人	・県書初め展(銀賞)比嘉寛
教頭	平川米三	(平成13)	中　5人	・県　歯、ロポスターコンクール(優良)伊佐歩美、松田ありさ
中学教諭	儀間勲			
小学教諭	比嘉里江			・高江区豊年祭　全職員、児童、生徒が参加。
補	金城千賀子			・私のアイディア貯金箱(メルパルク賞)比嘉寛
補	崎間美香			・村童話お話し大会(村代表)盛智紀、盛若菜、比嘉寛、伊佐歩美
司書	石井久子			
給食職員	金城智子			・地区中学文祭で三味線出演(5人)
ALT	マット・ハモンド			・西日本読書感想画(入選)盛智紀
				・県書初め展(銅賞)伊佐弓弦、盛若菜、伊佐歩美
中学教諭	仲地香織	2002年	小　7人	・全琉書道コンクール(優秀賞)仲宗根朝子
〃	山本薫	(平成14)	中　5人	・村童話お話し大会(村代表)盛智紀、伊佐弓弦、伊佐歩美
小学教諭	仲里春美			・地区PTA連合会より崎間善政さんが功労賞を受賞。
〃	砂川泰史			・全琉書初め展(金賞)仲宗根朝子、(銀賞)盛智紀
事務職員	謝花朝徳			・県道沿い下段工事とパイン植え付け(保護者、児童生徒、職員)、「山の花畑」完成。
非常勤	安富祖尚子			
ALT	ジェイソン・フォーン			
中学教諭	玉城技	2003年	小　8人	・地区中体連剣道、比嘉寛、上原夏美さん参加。
〃	喜瀬慎吾	(平成15)	中　10人	・中体連陸上女子400MR(3位)
小学教諭	喜友名美智子			・村童話お話し大会(村代表に)仲里悠、盛智紀、仲宗根朝子
〃	島袋健			・地区PTA連合会より松田信徳さんが(功労賞)を受賞。
非常勤	石原美希			
21代　校長	又吉健	2004年	小　6人	・地区中体連卓球個人戦参加　伊佐弓弦、崎間竜児
教頭	仲田スミ子	(平成16)	中　11人	・地区中体連卓球個人(準優勝)比嘉寛
中学教諭	仲原親宏			・児童オリンピック参加　仲里悠、盛智紀、高江洲海
〃	知念和美			・村童話お話し大会(村代表に)盛智紀
小学教諭	島袋直			・地区中学文祭、地区小学校音楽発表会で高江太鼓を披露。

職　名	氏　名	年　度	児童生徒数	沿　　革
補	澤由香			・全琉図画コンクール(最優秀)仲里沙樹、(優秀)石井歌歩
養護教員	太田まゆみ			・百周年記念準備委員会
非常勤	平良加代子			・沖子連子ども祭り石垣大会にて高江太鼓披露。
ＡＬＴ	ダニエル・バックイン			・英語ストーリーコンテスト(優秀)高江洲海、県大会へ。
中学教諭	金城史也	2005年	小　4人	・村童話お話し大会(村代表に)石川有紗
〃	當眞智恵	(平成17)	中　11人	・全琉図画店(優秀)當眞秀太、(優良)石井歌歩
小学教諭	仲村一美			・県教育版画コンクール(特選)當眞秀太
〃	嘉数奈津子			・百周年名簿作成
事務職員	入山留美			
補	平良加代子			
中学教諭	宮里孝子	2006年	小　8人	・平和講演会(平良敬子女史)・社会人講話(又吉亜成氏)
〃	平田和也	(平成18)	中　7人	・地区英語ストーリーコンテスト
〃	玉城裕章			・村童話お話し大会(最優秀)當眞秀太、地区大会へ参加。
〃	上間麻子			・県納税作文(優秀)宮城慶伍、(組合長賞)盛智紀
小学教諭	岸本五穂子			・全琉作文(最優秀)石原鈴也、図画(最優秀)當眞秀太
〃	新垣好國			・人権講話（大城松健氏：ギターリスト）
〃	仲村果林			・つつじ祭り高江太鼓出演
非常勤	比嘉静香			
事務職員	仲嶺奈月			
給食職員	石原理絵			・地区中体連バスケットボールに初参加し善戦。
22代　校長	宮原信也	2007年	小　8人	・創立百周年記念結成総会：会長に比嘉良昭氏
教頭	神谷順治	(平成19)	中　6人	・地区英語ストーリーコンテスト(1位) 高江洲海
中学教諭	伊波保			・高江区豊年祭：高江太鼓、空手を披露。
〃	新城寛子			・新報社会科新聞(銀賞)高江洲海、宮城慶伍、盛智紀、(銅)又吉朝太郎
小学教諭	比嘉美恵			・地区陸上400MR(優勝)宮城慶伍、高江洲海、盛智紀、又吉朝太郎
非常勤	岸本晴香			・中学生6人交流学習で福島県来た塩原へ。
ＡＬＴ	ボーン・ワイス			・村童話大会(村代表に)高江洲星
養護教員	上間洋子			・北部読書感想文(優秀)安次嶺海月、仲嶺峻真、宮城慶伍
事務職員	仲嶺若奈			・村観光協会事業で山の花畑に、つつじ100本植える。
				・ＰＴＡ総会(会長)安次嶺現達(副)石原理絵
小学教諭	具志堅惣敏	2008年	小　10人	・村ＰＴＡ連合より石井淳氏が感謝状を受賞。
〃	眞境名真弓	(平成20)	中　5人	・小学校高学年那覇・南部への修学旅行
〃	伊波梓子			・創立百周年記念座談会を郷友会、高江区民で行う。
中学教諭	我那覇リサ			・地区弁論大会(3位)又吉朝太郎、地区代表に。
非常勤	仲嶺奈月			・地区陸上400MR(2位)
非常勤	仲村真由美			・村意見発表会（村代表に)又吉朝太郎
養護教員	田中喜子			・本校が県緑化コンクールにおいて(準特選)を受賞。
事務職員	安谷屋和美			・税の作文コンクールにおいて(学校賞)を受賞。
給食職員	仲村ゆかり			・県ロボットコンテストにおいて奨励賞を獲得（九州大会へ)
				・創立百周年記念石碑除幕式を発祥の地の小浜の上、本校正門近くにて行う。
				・高江賞学校を創立百周年記念式典、祝賀会を本校体育館にて盛大に行う。

歴代校長

初代
大城栄俊
昭和19年12月～昭和21年3月

第2代
玉城幸男
昭和21年5月～昭和22年3月

第3代
松田健徳
昭和22年4月～昭和24年3月

第4代
宮城政忠
昭和24年4月～昭和27年10月

第5代
知念森正
昭和27年11月～昭和32年3月

第6代
知花高信
昭和32年4月～昭和33年3月

第7代
宮城剛信
昭和33年4月～昭和37年12月

第8代
渡久地甚栄
昭和38年1月～昭和42年3月

第9代
平識善福
昭和42年4月～昭和45年3月

第10代
上江洲朝真
昭和45年4月～昭和48年3月

第11代
富原正義
昭和48年4月～昭和51年1月

第12代
友寄隆治
昭和51年2月～昭和56年3月

第13代
比嘉彰
昭和56年4月～昭和59年3月

第14代
玉城肇
昭和59年4月～昭和62年3月

第15代
渡久地正義
昭和62年4月～平成元年3月

第16代
金城秀和
平成元年4月～平成5年3月

第17代
島袋啓一
平成5年4月～平成8年8年3月

第18代
大城誠
平成8年4月～平成10年3月

第19代
仲里恵孝
平成10年4月～平成13年3月

第20代
仲地末子
平成13年4月～平成16年3月

第21代
又吉健
平成16年4月～平成19年3月

第22代
宮原信也
平成19年4月～現在

歴代PTA会長

浦崎直政
昭和38年

伊地兼興
昭和41年　昭和49年
昭和48年

佐久本盛栄
昭和42年　昭和44年
昭和43年　昭和45年

嘉手刈真昭
昭和46年
昭和47年

糸洲朝吉
昭和50年
昭和51年

高江洲義吉
昭和52年　昭和60年
昭和53年　昭和61年

仲嶺武夫
昭和54年　昭和57年
昭和55年　昭和59年
昭和56年

今井孝
昭和58年

西銘晃
昭和62年　平成4年
昭和63年　平成5年
平成元年　平成6年

崎間善政

平成2年　平成15年
平成3年　平成16年

伊佐真広

平成7年
平成8年

松田信徳

平成9年
平成14年

伊佐真次

平成10年
平成17年

渡久地政久

平成11年

比嘉良寛

平成12年

石井淳

平成13年　平成19年
平成18年

安次嶺現達

平成20年

剣道10周年
記念誌
平成3年8月

高　江　小　中　学　校

高江小中学校ＰＴＡ

高江小中学校剣道部育成会

剣道部10周年記念行事

1. 試　合

期　日　8月4日（日）（午後2：00～4：00）
場　所　本校体育館
参加者　全児童・生徒、剣道教室(5)、同窓生、区民、学校職員
審判員　西銘　晃、他

2. 記念植樹

期　日　8月4日（日）（午後4：00～4：30）
場　所　本校運動場
参加者　全児童・生徒、同窓生、区民、学校職員

3. 記念式典

期　日　8月4日（日）（午後4:30～5：00）
場　所　本校体育館
参加者　全児童・生徒、同窓生、招待客、区民、学校職員

式次第		司会	山口栄三
(1)	開式のことば	副委員長	仲嶺久美子
(2)	校歌斉唱	伴奏	仲嶺正代
(3)	経過報告	実行委員長	崎間善政
(4)	学校長あいさつ	校長	金城秀和
(5)	感謝状贈呈	校長	金城秀和
(6)	剣道具贈呈	村長	平良昇康
(7)	部長あいさつ	部長	仲嶺正代
(8)	指導者あいさつ	指導者	西銘晃
(9)	来賓祝辞	村長	平良昇康
(10)	激励のことば	名護署長	宮良朗
(11)	閉式のことば	副委員長	仲嶺久美子

4. 祝賀会

期　　日　　8月4日（日）（午後5：00～6：30）

場　　所　　本校体育館

参 加 者　　全児童・生徒、同窓生、招待客、区民、学校職員

会　順		司　会	棚原武夫
(1)	開会のあいさつ	教　頭	棚原武夫
(2)	かきやで風	婦人会	高江洲キヨ子、他
(3)	乾　杯	教育委員長	嘉手苅真昭
(4)	余　興		
(5)	万才三唱	部育成会長	高江洲義勝
(6)	閉会のあいさつ	教　頭	棚原武夫

あ　い　さ　つ

校長　金　城　秀　和

本日、高江小中学校剣道部結成10周年の記念式典を挙行いたしましたところ、ご多忙中にもかかわりませず村長さんをはじめ、教育長さん、ご来賓の方々、地域の皆様のご臨席をいただきまして厚くお礼を申し上げます。

さて、本校の剣道部は昭和56年7月に誕生して、今年で10年を迎えたことになります。省みまするに、その間幾多の苦難を乗り越えながら着々と実績をあげ、昭和59年6月の国頭地区中体連での高江洲直美さんの優勝という栄冠を皮切りに、毎年の如く優勝を勝ち取り、昨年は県中体連の剣道大会で優勝、全県を網羅した富川杯剣道大会でも優勝・準優勝という功績をあげるなど、まさに剣道沖縄一と言っても過言ではない実績をあげることができました。これ偏に良き指導者に恵まれ、高江校の剣道精神「闘魂」をモットーに練習に励んできたことはもとより、村教育委員会をはじめ地域の方々のご理解とご協力のお蔭であり厚くお礼を申し上げる次第でございます。

児童生徒の皆さんはこの剣道で鍛えた体力と精神を学業の面でも大いに活かし、基礎学力の向上はもとより諸教育活動に邁進され、健康で明るく豊かな心を持ち、たくましく生きる人間として成長していきますよう願うものであります。

つぎに、剣道部結成以来、多忙の中毎日ご指導して下さいました西銘晃さんに改めて敬意を表するとともに心から感謝を申し上げます。

10年と簡単に口では言えますが、振り返って見るとたくさんの日数を積み重ねてきたわけでございます。その間の毎日々々の練習にはいろいろな面で、とても言葉では表現できない数々の苦難と素晴らしい思い出があったことと思います。これまでのご苦労に対し厚くお礼申し上げると共に、どうか今後とも尚一層のご指導を賜わりますようお願い申し上げます。　剣道は日本古来の武道の一つであるだけに、体力づくりや技を磨くのみでなく、礼儀正しく、明朗で、相手を尊敬する心を培うと共に根性・忍耐・気力の精神を鍛えあげるすばらしいスポーツでもあり、きっと21世紀に躍進する子供たちの育成に寄与するものと確信いたしております。

10年の節目を迎えて、剣道部がますます充実発展しますよう新たな決意で祝福するものであります。どうか今後とも村教育委員会はじめ、地域の皆様方の尚一層のご支援とご協力をお願い申し上げご挨拶といたします。

祝　　辞

東村長　**平 良 昇 康**

高江小中学校剣道部創立10周年おめでとうございます。昭和57年に高江中学校体育館が建設されたのを契機に剣道の稽古がはじめられ、国頭地区中体連新人大会などにおいて、優秀な成績を納め幸先きよいスタートとなり、昭和59年1月により一層の発展をめざして、高江小中学校剣道部が創立されたようであります。

それ以来、国頭地区大会や県大会において入賞、優勝を重ね、九州大会や全国大会へ県代表選手を派遣する快挙をなしとげるなど、修練の成果を上げめざましく躍進されていることは、本村の誇りであり、心からおよろこび申し上げます。

高江小中学校剣道部の特徴は、小学校一年生から中学校三年生まで全校生徒が部員であり、注目すべきことであります。日頃の練習を通して先輩に対する信頼と、後輩に対するいたわりや思いやりの心が養われ、学習態度や生活態度など学校教育に大きな効果を上げているものと思います。

剣道部を創立してそれほど長い期間が経過しておりませんが、すばらしい実績と伝統を築き発展されたことは、先生方や父兄の部育成と学校教育に対する強い熱意の現れであり、心から敬意を表します。

部員におかれましては、これからも練習に励んで心を磨き体を鍛えると共に、これまでの伝統をさらに発展させてくれるものと期待いたしております。

おわりに、創立10周年を迎えるに当り部員と学校、父兄が心をひとつにされ、高江小中学校剣道部が一層発展するよう念願して、お祝いのことばといたします。

あ　い　さ　つ

教育長　**伊佐常助**

高江小中学校剣道部が、創立10周年を迎えましたことを心からお慶び申し上げます。記念誌発刊にあたり、一言お祝いを申し上げます。

貴剣道部が昭和57年結成以来、幾多の困難にもめげず、校長先生を中心に、先生方、父母の英知を結集して小規模校のハンディーを乗り越え、県下有数の剣道部を築かれました。その努力に深く敬意を表します。

申すまでもなく、学校教育のめざす児童生徒の知、徳、体の調和のとれた全面発達を達成するために、部活動の果す役割の重要性は衆知の認めるところであり、礼を重んじる剣道をとおして、児童生徒の健全育成、体力の増進、競技力の向上を図ることは極めて意義深いものがあると思います。

高江小中学校剣道部が今日の隆盛を招いた軌跡をたどってみますと、部結成当初の昭和59年6月に行われた国頭地区中体連剣道大会において、男子3位、女子優勝というすばらしい成績をあげて以来、県下精鋭団体が参加する各大会において常に上位入賞をはたしてきました。特に昨年の如くは県中体連の大会で優勝、全県を網羅した富川杯大会優勝の偉業をなしとげられました。これらのことは、常に青少年の健全育成に情熱をもって、優れた技能とマナーを献身的に指導して下さいました高江小中学校ＰＴＡ会員の西銘晃氏のご尽力の賜であり、本日のはれの受賞を心からお祝い申し上げます。

高江小中学校の児童生徒の皆さんおめでとうございます。あらためてお祝い申し上げます。皆さんは「高江っ子」であることに誇りを持ち、先生の指導によく応え、厳しい練習に耐え努力を重ねて今日の素晴らしい伝統を作りました。今後も、勉強に体育に一生懸命頑張って下さい。

学校体育においては、生涯をとおして運動を実践する能力や態度を培うことが重要課題であります。

21世紀の生涯学習社会を、心豊かでたくましく生きていく児童、生徒を育み、一人一人の個性、能力の伸長を図るため、貴剣道部の果たす役割は、重要であり、学校、父母が一致協力され、貴剣道部が益々発展されますことを祈念しお祝いのことばといたします。

高江小中学校剣道部10年のあゆみ

昭和57年　高江中学校体育館完成　竹刀５本で剣道の稽古を始める
指導者　西銘晃
58年12月　国頭地区中体連　女子個人3位　高江洲直美
59年１月　名護桜まつり剣道大会
小学生個人優勝　高江洲淳
〃　3位　仲嶺真文
中学生女子優勝　高江洲直美
４月　高江小中学校剣道部へ昇格　顧問　前津栄位先生
６月　国頭地区中体連　男子団体3位
男子個人　3位　高江洲淳
女子個人　優勝　高江洲直美
７月　名護地区少年健全育成大会
中学１年優勝　仲嶺真文
中学2年優勝　今井　淳
中学女子優勝　高江洲直美
11月　富川杯剣道大会
中学男子2位　高江洲淳
59年12月　国頭地区中体連新人大会
中学男子優勝　高江洲淳
60年１月　名護市桜まつり大会
中学男子優勝　高江洲淳
〃　3位　仲嶺真文
４月　顧問　西銘美恵子先生
６月　国頭地区中体連
中学男子団体優勝
中学男子個人3位　高江洲淳　仲嶺真文
７月　県中体連　中学男子個人2位　高江洲淳
８月　九州大会

昭和60年８月　名護地区少年健全育成大会
中学男子団体優勝
中学１年男子優勝　仲嶺真人
～２年男子優勝　高江洲淳
3位　仲嶺真文
12月　国頭地区中体連新人大会
男子団体２位
男子個人優勝　仲嶺真文
２位　高江洲淳
61年１月　名護桜まつり大会
中学男子個人優勝　高江洲淳
３位　仲嶺真文
６月　国頭地区中体連
男子団体２位
男子個人優勝　高江洲淳
〃　３位　仲嶺真文
７月　県中体連
男子個人優勝　高江洲淳
７月　名護地区少年健全育成大会
小学校団体2位
小学校個人優勝　仲嶺麻紀
〃　２位　島袋　亮
中学校男子団体優勝
中学校男子個人優勝　仲嶺真文
〃　〃　３位　高江洲淳
８月　九州大会
11月　富川杯剣道大会
中学男子個人優勝　高江洲淳
61年12月　国頭地区中体連新人大会

昭和61年12月　男子個人優勝　仲嶺真人
昭和62年1月　名護市桜まつり大会
小学生個人2位　仲嶺麻紀
中学生個人優勝　高江洲淳
〃　〃　3位　仲嶺真文
6月　国頭地区中体連
女子個人優勝　仲嶺麻紀
男子個人2位　仲嶺真人
〃　3位　島袋　亮
8月　名護地区少年健全育成大会
小学校団体優勝（初優勝）
中学校男子団体優勝
中1男子個人優勝　島袋　亮
中3男子個人優勝　仲嶺真人
中学女子個人優勝　仲嶺麻紀
11月　富川杯剣道大会
中学女子個人3位　仲嶺麻紀
12月　国頭地区中体連新人大会
女子個人優勝　仲嶺麻紀
63年1月　名護市桜まつり大会
小学校団体優勝（初優勝）
小学生個人3位　仲嶺正代
中学男子個人優勝　仲嶺真人
〃　女子個人優勝　仲嶺麻紀
4月　顧問　崎浜秀宜先生
6月　国頭地区中体連
女子個人優勝　仲嶺麻紀
7月　県中体連
女子個人優勝　仲嶺麻紀

昭和63年8月　名護地区少年健全育成大会
小学校団体優勝（2連勝）
小学生個人優勝　仲嶺正代
〃　2位　具志堅麗奈
中学女子個人優勝　仲嶺麻紀
中2男子個人2位　島袋　亮
8月　九州大会　1勝
日本生命財団助成金により防具12組購入する
11月　富川杯剣道大会
中学女子個人優勝　仲嶺麻紀
12月　国頭地区中体連新人大会
中学女子個人優勝　仲嶺麻紀
平成元年1月　名護市桜まつり大会
小学校団体優勝（2連勝）
小学生個人優勝　仲嶺正代
〃　3位　具志堅麗奈
中学女子個人3位　仲嶺麻紀
6月　国頭地区中体連
中学女子団体優勝
〃女子個人優勝　仲嶺麻紀
〃　〃　2位　仲嶺正代
8月　名護署スポーツ少年団選抜
小学校個人優勝　具志堅麗奈
中学校個人3位　仲嶺正代
8月　幼少年剣道練成大会
5・6年の部　準優勝
3・4年の部　3回戦
10月　名護地区少年健全育成大会
小学校団体優勝（3連勝）

平成２年９月　小学生個人３位　具志堅正平
中１年男子優勝　高江洲将行
〃　３位　比嘉清太
中学女子優勝　仲嶺正代
〃　２位　具志堅麗奈
11月　富川杯剣道大会
中学女子優勝　具志堅麗奈
〃　２位　仲嶺正代
12月　国頭地区中体連新人大会
女子個人優勝　仲嶺正代
〃　２位　具志堅麗奈
男子個人優勝　高江洲将行
平成３年１月　名護桜まつり大会
小学校団体優勝（４連勝）
小学生個人優勝　具志堅正平
中学女子個人優勝　仲嶺正代
〃　２位　具志堅麗奈
４月　顧問　知花正宏先生
６月　国頭地区中体連
女子団体２位
女子個人優勝　仲嶺正代
〃　２位　具志堅麗奈
７月　県中体連

高江洲　悟

剣道部の皆さん、並びに監督さん始め先生方、父母の方々十周年おめでとうございます。
自分が剣道を始めたのは中学三年生の頃で同部が結成されたのもその頃でした。きっ掛けと言うか、剣道部結成の理由にもなると思うのですが、その年の学芸会で出し物を何にしようかという事になって、当時、理科の担任であった西銘先生が学生時代剣道の達人であったという事で、先生の指導のもと剣道の型のような太刀合いを教えてもらい演技しました。その後、剣道なら少ない人数の我校でもできるのではという事になり、初めたと思います。
当初は、防具はもちろんの事、はかまもなく竹刀は人数分何とかあったように思います。だから初めてはかまを着て、防具を付けて練習したときのうれしかった事は、今でも覚えています。あの頃、忙しい中教えて頂いた監督に感謝しています。

高江洲　直　美

防具や袴、竹刀さえ人数分ない、本当の一からのスタートで始まり、今や県でも名高い“高江校剣道部”。
晃先生の元で剣道を習い始めたのが12才。あの頃は部活もあまりなく、興味本位で入りました。入ってみると、暑く汗くさく、毎日、毎日素振りの練習ばかり。忍耐強くない私は、2度挫折したのです。しかし、1度入るとその魅力に取りつかれたように、又自然に戻ってやっていました。初めての試合では、まさかの逆転負け。今でもあの時のくやしさは忘れません。そして、初めての優勝。優勝というのは何度やっても嬉しいものでした。中学を卒業し、一年間は剣道から離れたものの、やっぱり竹刀を忘れられなかったのか、武道場に立っていました。
剣道で学んだ事として、厳しい練習で得る努力と忍耐。そして強い精神力と集中力。今社会人としてやっている私には、立派に役立っています。本当に、これからも晃先生、強い剣道部を育てて下さい。Fight.！

国士館大学　剣道部　高江洲　淳

この度、高江校剣部が十周年を迎え、卒業生の一人としてお喜び申し上げます。私も今年で剣道を初めて十年になります。高江校において剣道部の創部と同時に入部し、5年間、西銘晃先生に指導して頂きました。剣道部当初部員全員が初心者であり、竹刀だけで始まった素振り、擦り足などの基本稽古は不慣れな事もあり、生傷が絶えず苦しかったように思い出しますが、毎日苦しいながらも和気あいあいと楽しく稽古に励んでいました。
私は、西銘先生の熱心な御指導と周りの暖かい励ましの中、着実に力を付け、5年間で優秀な

成績を残す事ができました。桜祭り大会四連覇、二度の地区中体連個人優勝そして県中体連個人と富川杯大会での優勝と思い出の多い五年間でした。その中でも私自身の思い出深い大会は、中学一年の時の地区中体連個人において、涙ながらに三位入賞を果たした事と、その年の富川杯大会において２位となり先生にジャージを作って貰った事。そして中学２年の時、団体の選手五人が初めて揃い、二度の地区大会において優勝。２本の優勝旗を母校へ持ち返った事などが思い出深く残っています。今年、剣道部は創部十年という節目を迎えた訳ですが、これまで一人で指導なされてこられた西銘先生にとって、仕事の合い間を縫っての指導であり、大変忙しい十年だったと思います。しかしその苦労に対して、各大会での部員達の活躍、そして入賞した事が、先生への恩返しになったと思います。高江校剣道部は現在、中学ばかりでなく小学校も力を付け、その名を県下に轟ろかせる程の目覚ましい活躍をしています。しかし今に驕ることなく、更に西銘先生の御指導のもと稽古に励み、今後、剣道部が一層活躍する事を楽しみにしています。私も後輩達に負けぬよう、今後更に剣道を磨き、そして自分をより一層磨き上げていきたいと思います。

日本体育大学体育学部武道科二年　仲　嶺　真　文

十周年記念おめでとうございます。

自分が剣道を始めたのは、高江小中学校の剣道がスタートした、小学校５年生の時です。

あの頃は、剣道というものに対して、まったく無知でした。

しかし、ここまでこたのは、西銘さんの指導があったからです。

自分も、そのおかげで今もなお、剣道を続け、十年になります。

剣道は、礼に始まり、礼に終わると言われている通り剣道をやることによって、礼儀作法を知り、心身ともにきたえることが出来しまた。

これからも、自分は剣道を続け、自分を育てていきたいと思います。

後輩のみなさんも、いろいろ、きつい稽古などを頑張り、強くなって下さい。

これからも高江小中学校の剣道部が活躍することをお祈りいたします。

日本体育大学体育学部体育学科一年　仲　嶺　真　人

高江校剣道部創立10周年おめでとうございます。自分が小学校４年生の時から始まり、もう10年目を迎え、時の流れる早さに驚きさえ感じます。創立当時は、竹刀一本からのスタートで初めて行うスポーツに興味をいだきながら毎日の練習を楽しみにまっていました。そのころは、まだ学校の部活としては認められてなく、西銘晃さん一人が部員すべての面倒を見ていま

した。ほんとうに感謝しております。

北部地区の大会にも出場するようになり、すぐに優勝者も出ました。それが認められたのか学校も部活動として認め、たくさんの防具もそろい、いちだんと活気あふれる剣道部として成長していきました。

剣道部のおかげで、高江校も名がうれるようになり、そしてテレビにまで映ることができました。これからもっともっと高江校剣道部が良い伝統をのこせるよう、みんなで力を合わせてがんばっていってください。

興南高校剣道部　高江洲　義　春

高江小中学校剣道部の皆さん、部活にはげんでいますか。自分も毎日きつい部活にはげんでいます。このたびは、剣道部設立10周年を迎えまことにおめでとうございます。
剣道部の皆さん暑さに負けないように、元気よく頑張って下さい。

現在、高江小中学校の校長先生もかわっており、生徒も多くなったのにも、自分はびっくりしました。剣道部員も多くなったのも剣道部の西銘晃さんのおかげです。さて、お話しは変わりますが、去った6月2日インターハイは、興南男女ともアベック優勝しており、男子個人は惜しくも3位で、女子個人1位でした。興南高校では早朝練習もやっております。自分はこの高江小中学校を卒業し、進学も迷いました。でも自分は、興南高校に入学して、クラスも多くいるのでびっくりしました。西銘晃さん、父母のみなさん、もっともっと練習に励んで下さいますよう、心から感謝の言葉として終わりにさせてもらいます。また、健康や学習面、生活面、スポーツなどにがんばって下さい。自分も、そろそろ卒業し、進学することに決まりました。是非、剣道部の皆さん、夏ばてなどしないようにがんばって下さい。

開邦高等学校　剣道部　仲　嶺　麻　紀

4年生の時に初めて竹刀を握ったあの日から早7カ年の年月を迎えようとしています。その7カ年の間に私は、剣道を通していろいろな事を学んできました。

数々の大会に参加することにより、日頃、小人数の中で生活している私達にとって、あらゆる面で刺激を受けました。
そして多くの大会に参加して、数々の賞を取る度事に、自信がつき、「やればできる」ということを実感しました。このことは、剣道はもちろんの事、日頃の生活においても、積極的に行動する意味でも、たいへん勇気づけられた事だと思います。

私が剣道を通して、一番思い出に残っているのが、富川杯剣道大会、中体連剣道大会で優勝

の座を勝ち得たことです。特に富川杯の優勝カップを目にすると、絶対に優勝して、カップを手に入れたいと思うようになりました。しかし、それは、夢のまた夢にすぎないとばかり思っていたので、優勝できた時には、本当にうれしく、半分信じがたいような気持ちでいっぱいでした。

また中体連では、九州大会に参加することができるという別の喜びでいっぱいでした。

このように、数々の大会で優勝することができたのも、西銘先生夫婦の暖かいご指導のもとで育った成果だと思います。本当にありがとうございました。

そして、両親をはじめ、地域の方々が一丸となって、私達を励まし、応援なさったおかげだと思います。私達は、このようなすばらしい環境の中で、育てられたことにとても誇りをもっています。

後輩のみなさんも、このようなすばらしい環境の中で生活できることに、自信と誇りを持ち、これからも、高江校のよき伝統を引きつき、また、築き上げていくことを願っています。これからのますますの成長を楽しみにしています。頑張って下さい。

興南高等学校剣道部　島　袋　　亮

西銘さん、高江校剣道部のみなさんお元気ですか。自分も一生懸命勉学に、稽古に励んでいます。

自分が剣道を始めたのは小学3年生の時、国頭から高江に転校してからです。先輩に、やってみないかとさそわれ入部しました。最初のうちは、なかなか試合で勝てませんでした。でも小学校の6年の時準優勝してから剣道をしていて本当に良かったと思うようになりました。そして中学校生活約2年間で何度も優勝を経験しました。そして、念願の興南高校に入ることが出来ました。高校からは、中学とちがい、先輩・後輩が厳しいので練習中など気をぬく暇がありませんでした。初めての早朝稽古や内地への遠征などきつくて授業中など眠たくてしょうがありませんでした。

でも、つらい時は高江のみんなのことを思い出し励みにしてきました。高江で剣道をしていなかったら今の自分はなかったと思います。みなさんも頑張り伝統を守り続けて下さい。

けんどうをはじめて

3年　しまぶくろしょうこ

わたしは、けんどうをはじめて3年になります。

けんどうのすぶりのれんしゅうをしていると、てにまめができてとてもいたいです。だから、れんしゅうをさぼったこともあります。そんなとき、中学生のおねえさんに「れんしゅうをやりなさい」といわれます。

れんしゅうがおわったあとは、あせをいっぱいかいてあついです。それで外のかぜにあたったり、みずをのんだりすると、とてもきもちがいいです。

これからも、がんばりたいです。

おわり

剣道部に入って

3年　崎間　　格

ぼくは、小学校1年生からけんどうをやっています。けんどうは、見ためにはかんたんそうだとおもったけど、やってみると、とてもむずかしいです。また、れんしゅうは、あせもかくし、手にはまめができたりしてとてもきついです。

でも、けんどうは心と体をきたえるのにとてもいいスポーツです。だからやすまずがんばっていきたいとおもいます。

終わり

けんどう

4年　石井裕也

ぼくが、けんどうをはじめたのは、1年か2年のころからです。

さいしょのうちは、けんどうのことがよくわかりませんでした。でも、今は、少しずつけんどうのことがわかるようになってきました。

けんどうのれんしゅうをしていると、とてもつかれます。とくにすぶりのれんしゅうでは、手にまめができることもあります。だかられんしゅうをなまけたこともあります。

でも、これからは、れんしゅうをなまけずにがんばり、体をきたえていきたいとおもいます。

けんどうをはじめて

4年　当　間　　昴

ぼくが、けんどうをはじめたころは、けんどうのすぶりがうまくできませんでした。でもいまでは、だんだんできるようになりました。

ぼくは、けんどうをなまけて中がくせいにちゅういされたことがあります。だから、こんどからなまけないでがんばりたいです。それかられんしゅうをいっしょうけんめいやり、中がくせいのようにつよくなりたいです。

おわり

剣道部に入って

5年　高江洲　裕　介

「けいこはじめます。れい。」今日も剣道の練習がはじまります。

小手、面、どうを付けるので少しへんな気持ちになります。

ぼくがうれしかったのは、初めてしないを持った時です。それに小手、面、どうの3つのほう具を付けた時は、「わぁーっ」と思いました。少し苦しかった時は、れんせい大会でした。7月から8月までの月～金曜日は、一日中ずっと練習だったので少し大変でした。

今、感じていることは、もう少し一生けんめい練習し「お兄さんみたいに強くなりたい」ということです。がんばります。

剣道部に入って

5年　松　田　明日香

剣道をつづけて5年になりました。

あまり剣道のできない私がなぜ剣道部に入ったかといえば、みんなのやっている所を見て「やってみたいなあ。」と思ったからです。

そして、面をつけたかったからです。

初めての練習日は、見学でした。

次の日からはしないをもってすぶりをしました。しないはとても重かったです。ゆがんだり、しないをおとしたりで、一人ではとても大変でした。やっと面をかぶる日が来ました。むねがドキドキしていました。面をかぶってみると、とても息苦しかったです。次の日、ぼうぐをつけて練習するとぼうぐがとても重くて、動けませんでした。だから「早く終わらないかな。」と思いました。

これからもくじけずにがんばっていきたいと思います。

剣道部に入って

5年　渡久地　絵　美

「ヤー、メン」今日も体育館いっぱいにきこえる声。みんなもう練習を始めています。

私が剣道部に入ってもう、5年がたちました。入部のきっかけは、練習風景を見ていて楽しそうだったし、友達が「楽しいよ」といってさそってくれたからです。

毎日の練習はきほんの練習としあいげいこです。私は、練習の途中、「休みたいなあ」と思う時が時々あります。しかし、みんなが文句をいわずにがんばっている姿を見ると「私もがんばらなくちゃ」と思いなおし、また練習に力が入ります。時には先ぱいが「うまくなったね」といってくれます。私は先ぱいのあたたかい言葉にはげまされるとやる気がわいてきます。これからもがんばって練習をつづけていきたいです。

剣道部に入って

5年　西　銘　いち子

5年間の中で、私が一番うれしかったことは、始めてぼう具を買ってもらったことです。そのわけは、剣道をしている姿を見て、とてもうらやましかったからです。あんなぼう具をつけて練習することが、私の夢でした。

1年の時、剣道部に入って、1日目はすぶりだけでした。先に入っていた人たちは、みんなやさしくて、とても楽しくできました。

でも、初めてなので、すこしつかれました。

コーチたちのおかげで自分でも、うまくなったと思いました。

しばらくして、すぶりだけじゃなく、ぼう具を付けてもやりました。ぼう具は、思ったよりも重くて、体がだるくなるので、毎日がとてもいやでした。剣道のことを考えるだけで、頭がいたくなってしまい、もうけんどうをやめたいと思うこともありました。しかし、今まで、つづけていてとてもよかったと思います。

剣道部に入って

6年　具志堅　正　平

「ヤーッメン」体育館いっぱいにひびきわたるみんなの大きな声。ぼくたちは、学校が終わってから毎日練習をしている。

まず初めは、基本練習だ。ぼくは、基本練習が、一番大切だと思っているが苦手だ。でも試合げいこは、とっても好きだ。それは、相手をおもいっきりたたけるからだ。そのほかには、試合と同じように、タイミングをとらえたりできるからだ。

入部したきっかけは、みんなが練習している所をみて楽しそうだったからだ。練習の初めの日は、見学だった。日がたつにつれてやっと「竹刀」をにぎりすぶりをした。その時のうれしい気持ちは、今でも忘れていません。

それから6年間、自分ではがんばってきたつもりです。ぼうはん協会、さくらまつり大会でも、団体優勝、個人優勝した。次は、沖縄でも１位をめざしてもっと練習したいです。

剣道部に入って

6年　當間安奈

体育館に入ると、中学生や小学生の声が体育館いっぱいに、きこえてきた。中学生はやさしいし、親切だった。私は、みているだけでも、すごいなぁと思った。一度も剣道の練習をしたことのない私が、なぜ入部したかというと、みんなが、剣道部にはいって、楽しそうに、そして、一生けんめいに、練習をしていたからだ。私は、はじめて面をつけた時のことを今もおぼえています。中学生に面やこてを打たれました。その時は、剣道やりたくないなぁと思いました。そんなことが何回もあった。しかし、今は、「剣道をやりたくないなぁ」と思ったことは一度もありません。それは、中学生に、面やこてをうたれてもあまりいたくないし、いろいろなもんくもいわれなくなったからです。

これからも、基本げいこや、じげいこの時でも、一生けんめいがんばっていきたいです。

剣道部に入って

6年　港　川　美奈子

私は今、剣道の練習をしている。あまり、上手ではないが、練習してとても楽しい。上手ではない私が剣道をやろうと思ったきっかけは、友達のあせまみれになりながら練習をしている姿を見てからです。そのあせは夕日に照らされてまぶしいくらいでした。私が初めて剣道をやった時はすぶりでした。初めは、しないのもち方がわからなかったけど、友達が親切に教え

てくれました。その次の日は、あきらおじさんが来ていました。私は心の中がきんちょうして、かまえることができませんでした。今もすぶりの練習です。ちゃんとできると、「やればできるじゃないか」と言ってくれます。反対にちゃんとできないと、しかっているようなきびしい顔つきになる。こういう時は頭が重くなるようです。でもいやだなとは思いません。きびしい練習することによってじょうずになると思ったからです。

剣道を通して

中1　渡久地　真優子

私は3年生の時に剣道部に入りました。はじめはスブリていどだけどはじめて剣道着をもらった時はとてもうれしかったのをおぼえています。たくさんのわざを習うと練習も少しハードになってきてとてもつかれます。でも今はきつい練習にたえられるぐらいがんばってけいこをしています。

私は今までたくさんの大会にでてきました。負けてくやしい思いをしたというのがほとんどでしたが「今度こそ勝ってみせる」といういきごみも強くなってきました。私は剣道を通して自分の限界がどのくらいまでなのかが分かり、剣道のすばらしさを知ることができました。剣道から学んだにんたい力、根性をこれからの生活の中で生かせるように力をつけてがんばっていこうと思います。

剣　　道

中1　比　嘉　あかね

私は、小学校6年生の時、高江校に転校してきました。そして、はじめて剣道を見ました。私は剣道着を着ているみんなを見て、とても「かっこいいな」と思いました。しばらくして剣道部に入ることにしました。

剣道をはじめて最初の頃は、とてもきつくて「もうやめたい」と何度か思いましたが、今では、剣道部に入って良かったなあと思います。又、剣道がとても、楽しくなってきました。

これからも剣道をつづけ、今よりも、もっともっと力をつけて強くなりたいと思います。

これからの目標として1日も早く「級や段」をとれるように一生懸命がんばりたいと思います。

剣道部に入部して

中2　高江洲　将　行

僕は高江校剣道部に入部して、もう５年になります。今年で十周年ということを知り、入部してからのことが頭にうかんできました。

練習をしてきつかったことや楽しかったこと、大会に参加したことなどがありました。

剣道部は、とても活気があり練習も一生懸命ですばらしい剣道部だと考えています。

これから先、剣道を継続して練習し精神や体をきたえ、高江校の伝統をきずきあげていきたいと思います。

剣道をやって

中2　比　嘉　清　太

僕は、剣道をやって1年ぐらいたちます。

初めて、剣道の試合を見た時は、あまりの動きの激しさに驚き、「これからやっていけるかな」と思ったほどです。しかし、実際にやってみると、結構楽しかったことを覚えています。

初めての試合に出場したとき、緊張のあまり、コチコチになっていましたが、１回戦、２回戦とも不戦勝で三回戦にのぞみました。

結果は、あっというまに負けてしまいました。それでも成績は3位になりうれしかったこと、あの感動は今でも忘れられません。

これからも剣道をがんばって賞状をふやしていきたいと思います。

剣道をやって

中2年　屋　良　真理子

剣道を始めて、まだ1年足らずですが、今までいろいろな大会などに参加して、学んだことが沢山あります。他の人の試合を見ていると、とてもおもしろい。また、自分にないものを発見することができます。剣道の練習を通して、いろいろな人からアドバイスを受け、自分自身、少しずつ成長しているようで、精神的な面でも強くなった気がします。

又、試合では積極的に動くようにし、日頃のけい古で“力”を付けていきたいです。

剣道は3年生までしか続けられませんが、これから出せる分だけ“力”を発っきしたいと思っています。これからの学校生活に剣道で得た忍耐力、根性、を生かし十分“力”が発っきできるように頑張っていきたいと思います。

剣道を通して

中2年　具志堅　麗　奈

私が剣道をはじめたのが小学校3年生の時ですから、今年で6年目になります。今まで多数の大会に出場しましたが、私が1番思い出に残っている試合は小学校6年生の時の練成大会です。準決勝で南修館Aチームとあたり、代表戦にもちこまれた時、私が出場して勝った時の喜びとうれしさは、今でも忘れられません。

しかし、今までの練習の中で、つらいこともたくさんありました。面をつけはじめた時のあのきつさと、先輩方のきびしさがすごくいやでしたが、今ではなつかしい思い出のひとつになっています。

また剣道を通して体力、精神的にも強くなりました。これからも、今まで剣道を通して学んできたことを、これからの練習に生かせるように頑張っていきたいです。

剣道を通して

中3年　仲　嶺　正　代

私は小学校3年生の時から剣道を始めました。
すぶりから始めて、面をかぶれるようになり、そして現在に達するまでに、一番つらかったのが、面をつけて一週間ぐらいのことです。
あのころが一番つらく、やめてしまいたいと何度も思いました。しかし、歯をくいしばって今日まで継続してできたことは、少しでも自分への自信につながっているものだと思います。

そして、やはり一番の喜びは沖縄一を勝ちとった時のあの気持ちです。そして負けた時のくやしさは喜びよりも強く心に残るものがあります。そうやって、自分がきたえられていったことでしょう。

私は、剣道を通して技術が上手になっていくだけでなく、精神面でもすごく成長していったのではないかと思います。先輩達が築いてきたこの伝統をこれからも私達が引き続き頑張っていけたらなあと思います。

剣道をしてきて

中3年　島　袋　　茂

ぼくは、この6年間剣道をしてきて良かったと思います。体もきたえられるし、運動能力だって上がります。そのほかにもいい面もありますが、大変な面もあります。今は、ちょっとやさしくなっていますが、昔は、とてもきびしかったです。毎日剣道をする前に、5周走り、

走らなかったら先輩に、おこられました。その時いつも心の中でやめたいと思う日は、何度もありました。でもやめなくて良かったと思います。それも一つの思い出となったからです。今まで大変だったけどこれまで剣道をしてきてよく6年間やめないでつづけてきたなと思います。これまで剣道してきたことをほこりと思っています。そして、このほこりを後輩達がうけついでくれます。そして、またこの高江の剣道部をりっぱに育ててほしいです。

第六章

―回想録―

回想録

初代校長
大城　栄俊

昭和十九年四月高江校に転勤。独立校となり初代校長として、喜んで赴任した荷物をトラックで川田迄運び一泊し、翌日生徒や父兄、水陸両路から揺られ、車（部落）で一休みし先４粁を運んで貰った。家族は荷馬車で蜿蜒八粁山道を歩き学校に着いた。夕方迄には全荷物が運ばれやっと落着き歓迎を受けた。”山原ぬ高江新川やてん、んぞと二人なりば花の都”とあるが、天気の日も雨の日も、ここぞ私の安住の住家職場となった。

学区は、車、上新川、下新川、小浜の上高江と点在し児童数百二十名複式四学級職員五名、牛道からの下り口、学校迄の旧悪道路は、改修を望んだが中々できなかった。
生徒は素直で、青年学級も出席態度が良く、婦人も竹槍訓練に参加した。非難小屋、防空壕作り、その他色々御世いる。話になったことが思い出され深く感謝している。その後昭和二十一年四月嘉芸小学校に赴任した。

回想録

高江校の学校移転の思い出

第9代校長
平識　善福

1、校地移転の胎動

１９６７年４月１日付で高江校の校長に発令され、前任の先輩渡久地甚栄先生と事務引継ぎを終え、４月６日に高江に引越した暁、校長住宅で高江校区の有志の方々と初対面し夕食を共にしながら、私は「人間改造なくしてへき地の解消は出来ない。すべてのものは人が作り、造り出せる人間を育てるには教育環境整備することである。その為には現校地では望ましい環境を整備するには不可能と判断し、ただちに校地移転の具体化に着手したいので皆さんの絶大なるお力添えを」とお話したところお揃いの有志の皆さんは私を信じ、全面的に協力してくれました。赴任して一週間後の４月１３日に校地移転懇談会翌々の１５日には校地移転を区民総会で決議して校地移転促進委員会を結成されました。
４月２１日には前以って約束していましたので文教局施設課長と新垣・知名両主事の来校を機会に（一教室校舎が割当てられていたので現地調査ということで）校地移転問題懇談会に切り替え、連合区の中村課長、宮里村長、教育委員会、ＰＴＡ役員、村議と学校職員を交えて山羊料理をいただきながら話はトントン調子に進み、武村課長は大変よいことであるので進めなさい、そのかわり割当てられた一教室は当分保留しておくとの返事で百万人の力を得た感じで一杯だった。

2、校地の具体的な移転計画

１９６７年五月２９日東区教育委員会は校地移転を決議し、６月１４日に新校地（公有地）３・６３ヘクタールを東村議会で無償貸付を決議され年６月２７日中央教育委員会へ校地移転許可を提出し今年７月５日には赤嶺文教局長、笠井管理部長、施設課の上間主事に中山・玉木・新垣盛繁中教委員、連合区宮里教育長、大城次長、村から宮里村長、区教育委員と当時の文教行政の最高のスタッフがお揃いで現地調査に来られ、くまなく見聞されたことは高江校創立以来の歴史的なことであった。赤嶺局長とは宜野座地区教育長事務所勤務していた頃夏季認定講習時いろいろお世話をしたことで気心がよく通じていたし、中山興真先生は郷里の大先輩で玉木先生は社教主事時代の上司でさらに新垣先生は私が教員振り出し当時の校長で連合区の宮里教育長は宜中時代の校長・教頭の間柄とういうことで、私の移転計画に全面的にご協力の出来る生方ばかりで大変幸運だと思いました。今日赤嶺局長のお父様が息子の車に便乗され高江までおい出になられ、自分の息子の局長さんにいい聞かすように、「君も私が台湾のへき地で勤めていたことが思い出されるでしょう。高江の皆さんや平識校長の熱意にこたえるようにしてほしいのはどうかね」とやさしく話して居られた事が今の脳裏に深く刻みこまれています。

3、新校地の伐採作業始まる

７月５日の現地調査の結果、移転認可の暗示があり、全父兄と区民を動員しての伐採作業は８月１２日から始まる。山にはよく馴れている父兄や区民ですから新校地に建てられる高江校を夢見てのことか仕事はすばらしく能率を上げ、満面笑顔をたたえつつ２日間に終了することが出来ました。９月１６日には伐採後の焼払い作業を終え正式の移転認可を待つのみであった。

4、校地移転認可なる

中央教育委員会からの認可を一日千秋の思いで待っているところに中教委の事務局の稲福主事から電話があり、9月２２日午前１０時から高江校の移転問題について中教委に提案がなされるので上覇せよとの連絡を受け、９月２１日は教育委員会、ＰＴＡ正副会長と共に上覇し八汐荘に宿泊して２２日の中教委に臨む。玉木委員長の開会挨拶後事務局からの議案の説明を終え、討論なしで全会一致で可決されました。開会してわずか十分であった。高江校に赴任して半年全精力を傾中して来たことだけに身も心も張り詰めていた感激で携えて来たビールで全委員と文教局のスタッフと共に力強い乾杯を下さったのは今は亡き玉木委員長でした。中教局の全委員とかたい握手を交わし、精一杯頑張ることを約束しながら感激と感謝のひと時を過ごしたことも忘れ得ぬ出来ごとでした。

5、校地の地均し始まる

移転認可がなされ新校地の地均しを始めることになったのだが貧弱な財政で重機を賃借することが困難なため高江に駐屯している米軍の重機に頼ることになり米軍キャンプのクロス大尉に要請書を提出したところ私達はこの高江にお世話になっているので、自分が出来ることであるので演習として最大限に協力することになりました。１０月１日からブル２台とてん圧機１台で作業を開始した。１０月６日には村長、教育委員会、ＰＴＡ、米軍キャンプからクロス大尉外幹部が参加して僧呂による佛式の地鎮祭と地均工事の起工式が行われた。演習の合間とブル運転技術の指導ということで工事は思うようには、はかどらず再度クロス少佐（昇進）にお会いして校舎建築と大変かかり合いがあるので技術の上手な兵隊で継続して作業をとお願いしたところ翌２月２９日から馬力をあげて地均をしてもらいました。ところが３月中旬になり、ベトナム戦が激化したためブルを初め重機を引揚げて、途方に暮れ仕方なく村独身で地均しを進めることになり、村当局教育委員会

で協議の上業者に地均し工事を請負わすことになり５月３日に始まり７月１７日に地均し工事を完了する事が出来た。この間武村施設課長と上間主事は遠いところ数回に亘り工事の進み具合いを見に来てくださって激励をして下さいました。

6、校舎割り当てと校舎建築

１９６８年７月１８日の中教局において北部では初めての総アルミ材による窓わくの校舎（普通教室二、管理室一、便所一、宿直室一、理科・調理室一、準備室一、給食・更衣シャワー室二）が割り当てられる。校舎の割当てられる以前に児童生徒を確保するために校区民と教職員の協力によって前述の割当てに必要な人員を確保に努力したことも附記しておきたい。校舎の設計も終え、いよいよ指名業者に対する現場説明が済み１９６９年２月１４日入札が行われ名護町の比嘉組が５０、４３０弗で落札した。校舎建築工事は２月２２日から着工され、６月２７日には全区民総出で朝からスラブ打ち込み作業に当たることになる。当時の道路事情では大型ミキサーを名護から回送出来ないので小型ミキサー４台に区民を組分けして作業にとりかかりました。ところが夕方の６時になっても約二分の一程度をうわまわる能率しか出来なく、急いで夕食のおにぎりを準備して点燈した上で徹夜で作業を続けることにした。スラブ完全に打ち終わるまでにと疲れを忘れ頑張った。７月１８日の朝日が東の空に射す午前５時３０分頃ようやくスラブの仕上げのコテが入り全区民が一斉にヤッターの万歳を叫ぶ人もいた。スラブの上から眼下に見える高江富士にたなびく朝もやと東の水平線からの希望の陽光とが交ざり合い、あの時の光景は何と表現のしようもありませんでした。前日の朝から汗とセンメトのホコリにまみれた区民や職員の一人を眺め「やれば出来る何事も」協同の力に心温まる思いで一杯そして感謝の念で唯唯呆然とたちつくしていたこを・・・・・。

7、移転式典に向けて

校舎のスラブ打ちが終われば後は大工ですので、兼ねて計画していた同窓会結成のため東奔西走して一応まとめるこが出来ました、こんどは新校地周辺の整備作業に全父兄を最大動員して児童生徒職員も一緒に精一杯頑張り式典が出来るようになる。

8、移転式典の日迎える

１１月９日天気は上々、いよいよ高江校の創立以来の歴史的な日がやって来た。前日から区内の各家々には同窓生や中南部、北部に行ってる家族が来られ人の少ない高江は一部とでにぎわいを見せていました。午前１０時から１１時までの同窓生の結成は旧校庭で行いました。
一杯つめかけ、お互いに肩を抱き合って語り合っている者、涙を流して昔をしのんでいる姿が狭い校庭に見られ、ついホロリとさせられました。何しろ卒業以来初めてお会いした方々が以外に多かったということです。同窓会結成は校地移転の大きな副産物でもありました。　１２時から１２時３０分までの旧校地とのお別れ式というべき閉鎖式では学校長、教育委員長、同窓会長、児童生徒代表の感謝とお別れの挨拶を終え６１年間お世話になった学び舎との別れと感謝の黙祷をしながらもススリ泣く声があった。

回想録

第10代校長
上江洲　朝眞

昭和１５年４月１日教員定期異動で東村高江小中学校校長に発令された。僻地には誰も行きたがらない。僻地は苦労の多い能率の上がらない教育だとされてきたことが、僻地の概念であった。

赴任地の学校は名護から約４５キロの距離で、曲がりくねった山路を越えた小さい集落、高江部落入口に高江小中学校の建物があった。

学校の歴史と校区の概要は、学校は明治４１年東村川田尋常小学校高江分校として設立、昭和１９年東国民学校より分離独立した僻地３級地小中学校併置校で、私が赴任した当時は小学校児童３０名、中学校２８名の生徒数で、教職員に仲本吉雄、上原清子、松田吉弘、平田洋子、山城直三、牧志宗助、運天和夫先生が勤務され、私には初対面の先生方であった。

校区は大泊、車、牛道、新川の４つの山間部落で、人口１８６人、戸数４１戸、住民は林業を営み、その他パイナップル、甘蔗栽培で生計を維持していた。

高江地区は医療機関もない地域で、村に急病人が出ると、１４キロ離れた隣の平良診療所に運んでいた。

私が赴任前に読んだ本に、「僻地に勤務する教師達の姿」、山川武正著「教師の灯台」の冒頭に、「嵐の中で灯をともす。これが僻地教師の姿である。荒れ狂う僻地の嵐に、いくたびも打ち消されながら、自分の生命さえかけて、子ども達の心に希望の灯を点じようとしているのが僻地教師である」

僻地の教育は苦労が多く、しかも能率の上がらない教育だとされ、僻地教育を支える多くの教師達の教育愛に私は深く感銘を受け、僻地教育の第一歩を踏んだ。

回想録

教職員
比嘉　恵子

先ず初めに、私の懐かしい母校であります高江小学校の晴れの創立百周年祭ほんとうにおめでとうございます。学校職員を始めＰＴＡの皆様方、それに今日の式典の実現の為ご尽力くださいました役員の方々の弛まざる努力に依り、このような盛大な百年祭を開催するに至り衷心より感謝しお祝いの言葉を申し上げます。きて、私は１９５１年４月から１９５６年の３月迄五カ年間高江小学校で教鞭を執りました。あの頃を振り返ってみますと、いろいろと忘れがたい思い出が、蘇りますが、特にその中から印象的な事柄について述べて見たいと思います。私が赴任していた頃は、校長先生を含め職員が７名に児童生徒が７０名位で１年２年３年、４年５年６年と三学級複式でした。赴任当時は、暗中模索の状態で、指導の面でいろいろと困難な点がありましたが月日と共に研究を積み重ねていくうちに効果的な指導法も少しずつ身についてき

て、楽しくなって来ました。なにしろ三学級複式なので子供達を直接指導する時間が短く充分指導が出来なかった事は、今でも大変心残りです。その当時教室は、現在のように立派な物ではなく、茅葺校舎で風雨の激しい日には窓からの雨風が打ち込み、土間は水浸しで子供達は泥んこになり、転んでしまうことも良くありました。このような逆境にも負けずいつでも強く明るく伸び伸びと野性的で、ほんとに逞しい子供達でした。やっぱり子供は雨の子嵐の子とよく言われていますね。このような素晴らしい子供達にめぐり逢えて、ほんとに光栄でした。当時も今のように併置校でしたので、中学校の音楽と家庭科も担当し生徒達との思い出もいろいろあります。楽器といえば、たった１台の蓄音機と小さなオルガン、それに大太鼓小太鼓のワンセットだけでした。それでも子供達は、いつでも楽しそうに歌ってくれました。５年間には頻繁に大学教授に依る教育講座もありましたが、なにしろあの頃は交通が不便な為、長期間に渡る時は、国頭方面で下宿して受講することも多々ありましたが、それも忘れがたい思い出の一駒です。次は週末についての過ごし方を少しばかり述べてみましょう。週末には良くみんな揃って夜更けまで、子供達の話や雑談等で花を咲かせ、又お天気の良い日には、鏡のように澄みきった清らかな新川の川辺で、海老網や竹籠を手に、びしょ濡れになって海老捕りを楽しんだものでした。このようにして公私共に母校での５年間の貴重な経験は、いつまでも美しい思いでとして胸中に残ることでしょう。故里を誇りに思うと同時に、感謝の念でいっぱいです。長い教職を経て退職したのは嘉手納基地内にある米人小学校でした。
三十ヵ年日本文化の指導に当たり、その間いろいろな異文化に触れながら生きた英語を学ぶ事が出来ました。現在は沖縄市で健康にも恵まれ、明日の夢に向かって元気な日々を過ごしています。生まれ育った懐かしい故里たけ一あらか一、そして幼い頃裸足で通った思い出多き母校、それは私の胸中にいつまでも宿っている忘れがたい心の故里です。最後に高江小学校の限りなきご繁栄を祈願いたしまして、５年間の私の回想録とさせて頂きます。

母校での教職生活の思い出

教職員
崎浜　静男

１００年の歴史の中で多くの人材を世に送り出し、ここに創立１００周年を迎え、お祝いできますことを心からお喜び申し上げます。

私が高江小中学校の助教論として採用されたのが昭和２７年の４月であった。それが私の生涯の方向づけともいうべき教職生活のスタートとなった。当時の高江といえば「陸の孤島」とも言われるほど山間の最僻地であった。学校所在地は深い谷間を流れる新川川のほとりにあり、牛道の峠から約１キロ程の険しい坂道を下った所であった。小中併せて３０名程度の小規模で２学年又は３学年の複式学級であった。しかし、子供達は荒削りの自然の中で伸び伸びと育ち、至って開放的で明るく、素朴で活動的であった。

高江の人々は経済的には恵まれてないものの極めて純朴で礼儀正しく、人情味豊かで、誠実な人々が多かった。

さて、記憶の中から甦るいくつかを描き止める事にする。

中学３年の２泊３日の修学旅行は国頭一週であった。徒歩で高江を出発し、安田１泊、2日目は宜名真で1泊する。宿泊所は学校か公民館を利用した。そして待望の路線

バスで名護へ着き記念撮影をした。その日の中に東線のバスで終点の魚泊まで、そこからは徒歩で帰宅した。私は在職中に３，４回程、これを実施したことを記憶している。

引率は一人で道しるべもない細い険しい山道や道のない砂浜と岩場の方向を定めながら、2日がかりで宜名真まで歩きました。それこそ過酷な自然環境の中で育った高江の子供達ならではの冒険であった。

昭和３２年４月、知念校長の後任に知花校長が赴任、その秋、当時の立法議員に立候補するということで高江校を去った。それからは校長不在の学校運営であった。当時は教頭や事務職員の配慮はなく、私は校長代理を余儀なくされた。公文書の処理やその他最低限必要な学校事務をさせられたことを覚えている。特に3月になると卒業生の準備に戸惑った。卒業証書は、式典はどうするのか。悩みはたえなかった。いよいよ当日、大勢の関係者と児童、生徒の前で私は卒業証書を渡した。前代未聞のあの時の感動と達成感は今も忘れることはできません。

又、生徒と一緒に菊作りをしたことを覚えている。私達にとって菊作りは初めてでそれこそ暗中模索の手法であった。山から落ち葉を集め、培養土を作った。鉢は米軍の野戦用缶詰の空き缶を利用した。大菊の大輪の花や小菊の玉作りを咲かすことができた。

私にとって高江校での12ヵ年の教職生活は長く感じなかった。そこには師弟同行の教育というか、時間の経つのも忘れ、教師と生徒が自然に心がとけ合い、結びついていくような教育であった。受験勉強という名のもとに電気のない教室にランプを灯し、教師と生徒が一つになって続けられた。

当時の課外学習は今の学校教育ではとても考えられないことである。教師が子供の教育のために尽くす奉仕的な精神は今でも変わらない教師の大事な使命であると思う。

私は長い教職生活の中で高江校での教育が真の人間教育であったと今でも信じている。

私は高江の土地で生まれ、育ち、母校の子供達の教育に携わった事が最大の思い出となった。それが私の人生の糧となって今の自分があることを深く感謝している。

過酷な生活条件の中で貧困に耐え、常に献身的に学校を支え、育んでこれた高江区民の皆様、僻地校の悪条件と闘いながらひたすら子供達の教育に専念し、ご尽力下さいました多くの先生方に対しただ頭が下がる思いで感無量なるものがあります。最後に創立100周年を契機に高江校が今後、益々、充実、発展していくことを祈ってやみません。

「思い出」

教職員
崎浜　悦子

創立１００周年、おめでとうございます。

昭和２８年4月、私は高江小学校を初任校として赴任しました。学校は坂道を下った谷底の過酷な環境にあり、大変びっくりしました。担当は４，５，６年生の複式学校でした。初任者で毎日の授業が葛藤と戸惑いの連続でした。小学校の校舎は茅葺で中学と職員室は石造りでした。

放課後は村陸上競技大会へ出場のため、青年会と陸上の練習もやりました。疲れて夕食も欠食になることがしばしばでした。その噂を聞いた両親は小学３年の妹の洋子を説得して、高江校に転校させました。それからは是が非でも食事を作らなければなりません。

お陰で私は仕事にスポーツにと専念でき、

充実した生活ができました。

２ヵ年が過ぎ、私と洋子は喜如嘉校へと転任、転校しました。

昭和３８年４月、縁あって私は崎浜静男と結婚し、再度高江校に赴任しました。

小学校の茅葺き校舎もブロック校舎に変わり、１・２・３年の複式学級の担任です。勿論ちゃんとした教育課程などありません。毎日が大変でした。１・２年は前方の黒板、３年生は後方の黒板で授業を進めました。

１年生は幼稚園がなかったため、集団生活も無からの出発でした。１年生の授業の間、２・３年生は与えられた課題で自習です。

１年生が終えると２年生の授業、休み時間の鐘が鳴ってもどの学年かは授業です。教師は休み時間など取れない。午前中で１度位、職員室へお茶を飲みに行くだけでした。しかし「先生、先生」と子供達が後ろから着いて来るのです。あどけないあの情景が今でも、脳裏から離れません。

いつか僻地教育に携わる何名かの立法議員の学校訪問がありました。授業参観後、「先生大変ですねー。」と、激励の言葉をいただき勇気づけられたことを覚えています。学級にはひどい知恵遅れの子がいました。特殊学級もなく、この子にも特別な配慮をし心をくだきました。クラスの皆もこの子に良い感じで接してくれました。弱者を労わる心も少々は育ったかなと、自負しております。

子供達の楽しみの１つに水泳教室がありました。新川川の橋の下の深みの所でやりました。準備運動がすむと普段着のままで潔し飛び込みます。はしゃぎ合う声が山々にこだまし、賑やかな雰囲気になりました。

私は車部落から学校までの片道４０分もかかる道、しかも牛道から学校までの細い坂道を登り下りで通勤しました。３人の子宝にも恵まれました。３人目のお産で失敗しそうになった時、ヒジャグワーの方々に助けられ、無事出産しました。

何度か他校への転任も申し出ましたが。地元の職員がいないと困る、と校長先生などに止められ、どうにか９ヵ年も務める事になりました。

昭和３９年４月、長女が小学１年入学の年に本部小学校へと転任しました。

私は３８カ年間、８校の小学校で勤務しましたが、どの学校でも、さまざまな課題や困難にぶつかり、その度毎に高江校での教育活動を思い出しました。子供や環境はちがっていても、ここでもきっと出来るはずだと、自分を勇気づけました。

私の長年の教職生活、その教育の原点は高江校にあったのです。

厳しく豊かな高江の自然、明るく素直だった子供達、人情味あふれる暖かい心の高江の人々など、いつまでも私の脳裏から消えることはないでしょう。

最後になりましたが、創立１００周年記念事業期成会、学校当局の皆様に厚く感謝申し上げます。そして、高江校の限りない発展と皆々様の幸せを心からお祈り致します。

校地移転の思い出

元高江校教職員
玉城　勝郎

創立１００周年まことにおめでとうございます。今日まで本校を支援して下さいました関係者に心から感謝申し上げます。

私は昭和４２年（１９６７年）４月に西原中学校から転勤し高江校で３年間勤務しました。９００名の学校から１００名足らずの小規模校に移り当初は戸惑いの毎日でした。中学校１年生１２人の担任になった。教科書指導は数学、理科、技術家庭、それに体育の４教科で教材研究は困難の極みで

あった。数学以外の教科指導は不十分で心が痛んだ。子供達に確かな学力を身に付けさせる事は教師の使命であり義務である事を考慮したとき、教員の数は関係法令でどうにもならないことで小規模校の大きな課題である。しかしながら子供一人一人と教職員との心の繋がりは大規模校にない深いものがあった。保護者のみならず、青年会、婦人会、老人会、区の全ての団体、地域の方が連携して学校教育活動に深い理解があり学校行事等は地域の行事そのものでした。

小規模校の特性を活かす取り組みの一つとして自主性、主体性を育むために全国的にも例の少ない授業の始りや終わりの時鐘は一切鳴らさない静かな教育活動を推進された。次に完全給食である。時の校長（故　平識　善福先生）は赴任するなり子供達に体力を付ける事を強力に推進しために県内でもまだ完全給食が少ない時期に、高江校は実施に踏み切った（１９６８年３月）。

食材は各家庭からの提供を呼びかけ、足らない物品は事務職員（現東自動車整備工場社長　崎間　善政氏）が名護市まで買い出しに行った。彼は学校事務と食材の買い出しで多忙の毎日であった。燃料の薪は児童生徒が各家庭から持ち寄った。

なお、調理は毎日の生活で多忙な婦人会員が当番で当たり、完全給食がスムーズに実施された。地域が学校教育への絶大なるご協力とご理解のお陰であり感謝に耐えなかった。正に学校は地域であり、地域が学校を育んでいた。

沖縄県へき地教育研究大会の原点は高江校と古宇利校である。沖縄県へき地教育研究連盟会を組織してその会長に校長の平識善福先生が自らすすんで就任した。へき地教育の充実発展のために全力を傾注する決意であった。第一回研究大会（１９６９年２月）の分科会場は本校と古宇利校で、全体会場は名護市で開催された。本校での公開授業では複式での一人学習が出来るシンクロフアックス（磁器録音機）が導入され注目された。

さて、私にとってとりわけ脳裏に残る事は校地移転である。昭和４２年４月に赴任した平識善福校長は校地を詳しく点検して子供の学習環境の不十分さに心痛め、学習環境を整備するために校地移転を決意した。

４月早々区民総会で移転決議を採択し、その第一歩を踏み出した。歴史的な大事業で区民から様々な意見が出たのも事実である。しかしながら、校地移転は区民の賛同するところであり地域あげて推進する事となった。校長の思いは子供達の人格形成だけでなく、風光明媚な高江区の将来を見据えての大きな展望からの発想であった。すなわち、高江区をユートピア（理想郷）にしたい考えであり、理想郷を造る事の出来る人材の育成を目指していた。その事を端的に示しているものが、校訓「開拓」である。

移転場所の伐採作業は区民老若男女全区民が奉仕作業で進めた。主に林業で生活して時間も所得もゆとりのない頃でその作業は大きな負担であった。にもかかわらず将来を担う子供らのために積極的に参加していた。

校地の整備作業は公費の厳しい時期であったので高江駐屯の米軍に協力してもらった。いよいよ待ちに待った校舎建築のスラブ打ちは、金曜日の午後３時頃から翌朝の午前６時頃まで全区民、全教職員の関係者が徹夜で作業が進められた。食事は婦人会が作ったおにぎりを食べた。まさに手作りの校舎建築であった。移転に取り掛かって２年半の歳月が過ぎていた。

新築校舎は本県ではまだ普及していない生徒玄関・職員玄関を設置したモダンな造りで、県内の学校職員、ＰＴＡ、その他関係者が毎週のように視察に訪れた。

昭和４４年（１９６９年）１１月に移転記念式典を行い。新生高江校の隆盛が約束された。

校地移転の大事業を成し遂げた事は、高江全区民の教育への深い理解と平識校長の優れた指導力、情熱の賜物であった。

子供達は素直で明るく伸び伸びと学校生活を送るとともに、対外的には文化・スポーツ面で地域の期待通り活躍していた。

創立１００周年を契機に子供達が世界へ大きく羽ばたく事を期待するとととともに、高江校のますますの飛躍を祈願致します。

思い出

卒業生
信田　淳

高江小学校創立１００周年、おめでとうございます。卒業生として大変喜ばしく思うと共に、これまで母校の発展にご尽力頂いたすべての方々に心から感謝を申し上げたいと思います。

私たちにとって高江校は人生の原点であり、そして誇りです。県内でも屈指の少人数校ですが、決して現状に甘んじる事無く、逆にその特性を十二分にいかし大自然に囲まれた環境の中で伸び伸びと成長できたと思います。先生方を始め、地域の皆さんから温かく、時には厳しくご指導をして頂ました。少人数校であった為、みんなで協力し、助け合う事の重要性を自然と学び、そして支えて下さった皆さんへの感謝の気持ちを、必然と学ぶ事が出来ました。学校全体が家族のような温かい雰囲気の中で過ごせた毎日は、何物にも変えられない貴重で幸せな思い出です。早いもので中学校卒業から２０年が経過し、現在は千葉県で生活しておりますが、当時の思い出は今でも色褪せる事無く覚えています。高江校では素晴らしい先生方にご指導を頂き、今の自分があるのも小中学生の大切な時期に、しっかりとご指導を頂いたお陰と感謝しています。素晴らしい仲間にも恵まれ、人数は本当に少ないのですが共に過ごした毎日は楽しく充実していました。地域の皆さんには学校行事でもいつも惜しまず協力して頂き、私達を支えて下さいました。ありがとうございます。

そんな高江校での一番の思い出は、剣道との出会いです。昭和５７年、当時小学校５年生の私は、酪農を営む西銘晃先生の指導のもと、完成したばかりの体育館で仲間と共に剣道を習い始めました。当時は、一年を通じての部活動等が無く、生徒達に何か打ち込めるものを与えたいと言う西銘先生の熱意により活動が始まりました。全校生徒の殆どが部員となり、それまで倉庫の中で埃を被っていた竹刀や防具を持ち出、稽古が始まりました。最初の基本稽古では手足にマメができ、その痛さと格闘しながらも懸命に稽古した事を懐かしく思い出します。もともと体を動かすことが得意で、日頃から野山を駆け回っていた私達は、持ち前の体力と根性で稽古に励み、剣道は勿論のこと精神的にも成長していくことが出来ました。限られた人数と環境の中、強くなりたいという純粋な気持ちで切磋琢磨し、迎えた中学３年時の地区大会。中学生は全校生徒が男子ばかりの５人でしたが、選手そして応援して頂いたみんなの力を合わせ、見事に団体優勝を勝ち取ったことが最高の思い出です。私は現在も剣道を続け２５年が過ぎました。高江校で剣道と出会っていなければ、今の人生は無かったでしょう。人生を通して打ち込める剣道に出会い、様々な事を学び経験する事が出来ました。

私を育ててくれた高江校、ご指導頂いた西銘先生、応援し支えて下さった両親始め地域の皆さんに心から感謝し、これからも剣道を続けていければと考えています。

高江校では何事においても、常にその限られた人数の中で生徒が一人で何役もこなさなければなりません。何でも自分が責任を持ってやらなければならない状況で、勉強を始め、普段から普通にやっていた様々な活動やスポーツ、ご指導頂いた事が自然と身に付いていたのでしょう。当時に学んだ多くの事が社会人となった今でも私の一生の財産であり、数多くの場面で大変助けられています。高江校で学び、培ったもの有り難さに感謝し、改めて素晴らしい学校だと振り返りながら、卒業生でよかったと心から感じております。

１００周年という節目を迎え、高江校には新たな歴史が始まります。学校と地域、そして関係者の全てが一体となり、高江地区児童生徒の成長と原点として、いつまでも歴史を刻み続けてほしいと強く願います。
社会全体が急速に発展し、便利で自由な時代になりました。しかし、どんなに生活が豊かで便利になろうとも、人が人として不十分ではいけません。人として忘れていけない優しさや思いやり、人として大事にすべき事を学べる学校こそ高江校だと私は思います。その立地条件や学校規模においては決して恵まれた環境ではありませんが、児童生徒を始め、関係者の皆さんが現状に甘える事無く、常に先を見据え、目標を持って充実した毎日を過ごせる学校として、いつまでも有り続けてほしいと思います。
そしていつの時代にも、卒業生が胸を張ってそれぞれの輝ける未来へと羽ばたいていく事を、心から願っています。

結びに、児童生徒の皆さん、先生方、そしてさんを始めとする関係各位が､地域の皆 今後も手を取り合って協力し、その絆をより一層深め、高江校がこれからも益々発展する事を、心からお祈り申し上げます。

創立１００周年、本当におめでとうございます。

「思い出」

卒業生
大城　麻紀

高江小学校創立百周年、誠におめでとうございます。卒業生として、大変誇りに思い、嬉しく思います。

私は、小学校入学から、中学校卒業までの九年間、現在の「高江小、中学校」で過ごしてきました。当時も、全校生徒十二名程の小さな学校で、学校全体が家族のような雰囲気で、先生方には、我が子のように接して頂き勉強を教わりました。そして、学校が終わるとよく上級生に連れられて、山に遊びに行った事を覚えています。木の実を取ったり、虫を捕らえたり、今思うと、山の中に入って行く事など、想像もできないのですが、当時は、それが、日常の遊びの一つでした。私の記憶では、「ミーコーカーキー」というキウイの小さくなった様なものや、「フートー」「クービー」というどれもお店にはない木の実を採っては、家に持ち帰えって食べていました。

このように、自然と親しむ一方で、私達がこの小さな学校から、大きな学校に負けないくらい活躍をし、自信につながったのが、「剣道」です。西銘晃さんの指導の元、毎日の放課後の練習に、夏休みの早朝練習、そして、年の暮れには、年越し稽古と体育館一杯に響く声で、毎日練習に励んできました。また、数多くの大会に参加し、県大会で優勝する事もできました。その時は、「小さな学校でも、やればできる」とすごく自信がついたものです。そして、その経験が、卒業後の進路や生活の糧になったように思います。
人数が少ないという事と、私自信の性格も重なり、競争するという意識がその当時、大変乏しかったように思いましたが、剣道を通して礼儀作法はもちろんの事、自分自身の意識の持ち方にもすごく影響を与えてくれました。そして、ボランティアで毎日、仕事の合い間に指導して下さった、西銘晃さんに、改めて感謝致します。ありがとうございました。

現在、四児の母になり、主人の転勤で、東京で生活しておりますが、子育て真っ最中の私にとって、高江という自然の豊かな環境で伸び伸びと、日々を送れた事は、大変貴重な経験であり、幸せな事だと実感しております。

毎日の生活を自然の中で過ごし、自然の恵みをたくさん頂き、自然と共に成長できた私は、今でも、ベランダに緑を植えたり、虫を飼ったりと、小さい時の日々が生活の一部になっています。

そして、夏休みになると、子供達を連れて里帰りし、学校の運動場やプールなども、利用さ

せて頂いています。
　高江校で経験してきた事や、先輩方に教わった事、そして地域のみなさんと共に成長できた事を、子供達にも語り継いでいきたいと思っています。
　高江校の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

高江校の思い出

卒業生
寺岡　正代

高江校創立１００周年、おめでとうございます。私は１９８３年より９年間在籍しましたが、母校での様々な出来事を思い出します。
　最初に脳裏に浮かんだのは、校庭の様子でした。その校庭には常に先生方や旧友たちと植物を植えていたので、どの季節にも花が咲き乱れていました。当時、その校庭を歩いたり、花を眺めたりしながら、漠然と将来の夢などを抱いていた事を思い出します。
　生徒時代、最も印象深いのが、毎日汗を流しながら剣道の稽古をしたことです。小学３年生のころから、西銘晃先生の献身的なご指導により練習に励みました。そのかいあって、大会では数々の賞を獲得する事ができました。そして、それは母校を卒業した後も私の大きな自信となり、継続して取り組むことの大切さを教えてくれました。
　また、運動会、遠足、学習発表、童話大会、お話発表会など、学校での様々な行事も思い出されます。小さな学校だった事もあり、どの行事においても生徒皆が主役でした。積極的に取り組んでいた自分を、懐かしく思い出します。

「思い出」

卒業生
具志堅麗奈

私は小学校１年生の３学期に高江小中学校に転校してきました。ちいさな教室と人数のすくなさに驚いたことを覚えています。
　児童生徒の総数が１クラスにも満たない人数ではありましたが、皆が兄弟姉妹のようで、また先生方にも優しく接していただいて、とても穏やかに過ごせた時間だったとおもいます。
　そこでは皆が剣道部に所属していて皆がやっているからという理由で始めたのですが、小さな学校でも大きな学校に負けないくらいの実績をつくれたことをあの頃はとても誇らしかった気がします。高校や大学に進学しても剣道を続けることができ、剣道を通して今ではたくさんの素晴らしい仲間に恵まれ感謝しています。
　小学校・中学校も含め、私の学生時代はほとんど部活動に明け暮れる毎日でしが、それも今ではいい思い出です。

第七章

―児童生徒の百周年作品―

児童の作文・絵の紹介

11がつ23にち（日　ようび）
だいきゅうねんきねん　一くみ
なまえ　ながみねしんぺい
ぼくは、
くしゃ、ラ
ねんに、おどり
をしました。
そして、ぜん
ぶ、ばっ
だのちソ
ばっ
ぜんぶ
ラ
ねしたの
かで
だ
です。

11がつ23にち（日　ようび）
だいきゅうねんきねん　一くみ
なまえ　大ミえひろたか
ぼくは、百しゅう
年のおどり
を見て、みん
ながえがおで
上手だったと
思いました。
百しゅう年
記ねんはとて
もたのしかったです。

11がつ23にち（日　ようび）
だいきゅう年記念ねん　一くみ
なまえ　あしみねみづき
わたしは、百しゅう年
記ねんで、おどり
をして、自分でも
上手だと思いました。
小学校おめ
でとうございます。
めざせ二百年

百周年きねん

三年　みかど　まさき

十一月二十三日に、高江小学校の体育かんで小学生全員でぶりをしました。

人がたくさんいたのでびっくりしました。

おどるときーどきどきしました。

おどりの本ばんは、たのしかったです。

おどりがおわったあとに、みんなで、ごはんをたべました。

おいしかったねぴ

といっていたのでうれしかったです。

百周年記念

三年　仲嶺　岐真

十一月二十三日日曜日に　学校の百周年記念のお祝いをしました。百周年記念は、体育館でやりました。

百周年のお祝いには、高江小を卒業した人や、前に高江小学校の先生だった方、地いきの人などが、たくさん来ていました。ぼくは卒業生や、高江小学校の先生をしていた人がこんなにたくさんいるんだなあと思いました。

卒業生や、前の学校の先生、地いきの人をあわせて、二百人以上の人がいました。

六校時になってぼくたちは、コンピュータ室で体育着に着がえて、祝が会でひろうするおどりのじゅんびをしました。

しばらくして、ぼくたちのおどる番になりました。ぼくたちは、「よさこい エイサー球王」をおどりました。

練習の時は、あまり上手におどれながらけど、本番はうまくおどれたら、いいなあと思いながらおどっていました。

さいしょは、少し長いおどりだなあと思ったけれど、おどっているうちにどんどんおどれてきたので、よかったです。

むずかしいおどりだなあと思ったけど、練習をつづけていっておどりをおぼえられたので、おぼえられてよかったなあと思いました。

当日、おどっている時は、まちがえないかなあと、とてもきんちょうしましたが少しまちがってしまいましたけおどりが終わって、ほっとしました。

その後、式服に着がえて、音楽室に向かいました。

音楽室に着いたら、いすとつくえを用意して、オードブルを食べました。おいしかったです。

六校時が終わって校門の前で、記念写真をとりました。

ぼくは、ぼくが大きくなっても、まだ、学校がたっていたらいいなあと思いました。

百周年のお祝いの言葉

四年　スミス　洋志

十一月の三日は、学校が百周年なので、学校をきれいにしました。

ぼくは、トイレのそうじや体育館のうら口の方のかりたんやかべを、デッキブラシできれいにしました。

ほかに、体育館の中の舞台の上や、放送室や、体育館の中を、そうさんのぶーかりんできれいにしました。

ほかにも、校門のメロをそうじしました。そうしをして、けっこう学校はきれいになったなと思いました。

ほかにも、プランター運びもしました。プランターは、とっても重かったけど、二人で協力して、プランターを運べたからよかったです。プランターを運んで学校が花いっぱいで、きれいでした。

そして、休みの日には、たまに学校の手伝いをしました。

プランターは、道のはしなどにおきました。

ぼくは、プランター運びをやって、とっても つかれましたが、そうじをする時いつも、百周年のためにきれいにするぞと思いながらやりました。

いよいよ百周年記念の日が来ました。ぼくは、式典には参加ができませんでした。

だけど、祝が会での友達のおどりを見て、とっても上手だったから、すごいなぁと思いました。

学校にある、「夢」という字を見たら、何かしょう来の夢あるかなぁと考えてしまいます。

ぼくは、「夢」という字を見て、しょう来のゆめを見つけたいです。

「夢」という字を書いてください。たよしあき先生が、ねて見る「夢」もあるし、起きて見る「夢」もあるけど、起きて見る「夢」のほうがいいよとりっていたので、ぼくは、今は、夢はないけど、いろんなところを見て、

高江小学校百周年おめでとう

四年　安次嶺　聡大

十一月二十三日の百周年記念日に向けて、ぼくたちは、そうじの時間に体育館のそうじやいろいろなことをして、学校をきれいにしました。また四十五分の休み時間や体育の時間に、百周年記念祝が会の時におどるダンスの練習をしたりしました。

そうじでは、デッキブラシで体育館のうら口をこすったり、校門のところをこすったりしました。タオルで、いすをふいたりもしました。

ダンスでは、「よさこいエイサー琉球王」というダンスの練習をしました。ダンスは、体みの日以外の日は、毎日練習をしました。ダンスの練習では、できなかったところがどんどんできてきて、本番まで、がんばりました。

そして、十一月二十三日の百周年では、はじめに式典をしました。式典は、一時間くらいしました。

すずなり兄ちゃんが、学校の代表で、あいさつをしていました。それを見て、「すずなり兄ちゃんって分っこいいな」と思いました。

そして、すえこ校長先生が、あいさつをしていました。ぼくは、女の校長先生がいたんだと思いました。そして、最後に、ぼくのお父さんがPTA会長なのであいさつをしました。ぼくは、とてもびっくりして聞いていました。

その後、着がえをし、祝が会であおどるじゅんびをしました。おどる前に、まちがえないようにがんばりたいなと思いました。そして、ぼくたちの番が来て、ぼくは、とてもびっくりさしました。そして、やってみたら、少しまちがえたところもあったけど、練習の時よりも上手にできたのでうれしかったです。

百周年祝が会は、ほかにもいろいろなおどりをしていました。ぼくたちのおどりを見て、地いきの人が、「上手だ」「たね」

とりってくれて、とってもうれしかったです。
みんなが今日は、大成功だったねと言ってくれました。ぼくは、本当に今日は、いい一日だったなと思いました。

百年いきた百江校

四年　石原　雅三

十一月二十三日日曜日は、学校のたん生祝いの日でした。百周年記念のために、そうじの時間に体育館をそうじしたり、外の歩道の石の方を、デッキブラシでこすったりしました。

四十五分の休み時間には祝が会でみんなの前でおどるダンスの練習をしました。ぼくは、百周年記念式典の前から、成功するか不安でした。練習はつかれましたが楽しかったです。

ついに、百周年の日がヤってきました。ぼくは、と、てもきんちょうしました。リハーサルが終わり、いよいよ本番が来ました。

ぼくは、きんちょうしながらぶ台に出て、まくが上がりました。ぼくは、三回ぐらいまちがえたけど、なんとかごまかすことができました。最初から最後まで笑顔でいようとがんばりました。まくがおりると、ぼくはほっとしました。その後、コンピューター室で着

がえました。
ぼくは、いつも学校に行く時百周年の記念の石ひを見ます。
石ひには、高江校の卒業生のよしあき先生が書いてくださった「夢」という字が書かれています。よしあき先生がぼくたちに夢という字をおくってくれたのでとてもうれしいです。
今のぼくは、夢をさがしている中です。これから、やりたいことを一つ一つちょう戦していきたいです。
おめでとう。高江校。いつまでもぼくたちを守り続けてね。

僕と高江小学校

六年　石原　鈴也

歴史がいっぱい詰もった学校に
今　僕は立っている
笑ったり　けんかしたり
支え合っている　仲間たちと

たくさんの先輩たちが
通っていた高江校
先輩たちが築いてきた高江校
たくさんの気持ちがつまっている

地域の人たちが集まって
僕たちのために立てた石碑
高江校のみんなの心となった
「夢」ときざまれた石碑

高江校100年の歴史　伝統
人々の思いを胸に
今日から僕は夢を持ち
前を向いて歩いていく

百周年記念

五年　石井　歩

わたしは、百周年記念式典にこんなにたくさんの人が集まるとは思っていませんでした。高江小学校ができてから百年もたっていることは、とてもすごいことだと思いました。

今から、百年前の高江小学校は、人数も多く、毎日、まきを持ってきて、そのまきで給食を作っていたそうです。わたしは、高江校について、勉強することで百年の間には、とてもたくさんの歴史・思い出があって、それがいっぱいつまっている高江小学校でわたしは、勉強しているんだと思い、感動しました。

高江は、緑が多く、いろんな生き物がたくさんいます。わたしたちは、このすばらしいかん境で勉強や、いろんなことができてとても幸せだなと思いました。

百周年記念のときに、昔、学校にいた校長先生、担任の先生、高江小学校の生徒だった人などが来ていて、みんな久しぶりの学校、久しぶりに会った友達を見てとてもうれしそうな顔をしていました。わたしたちが祝賀会で、おどりをおどっているときもおじいちゃん、おばあちゃん、地いきの人や先生方もみんな見てくれていました。それは、みんな、高江小学校が大好きだったからだと思います。練習してきたことを全部出しきれたので大成功だったとわたしは思いました。

百周年では、式典だけでなく、地いきの人たちの人たちの協力によって記念の石ひが立てられました。石ひには夢という文字が書かれていました。夢という文字は、学校の生徒みんなに、夢をもってほしいと願いをこめて石にきざまれたと説明を聞きました。この石ひにきざまれている夢を持っていれば、まっすぐに進むことができると思います。また、みんなが落ちこんでいるとき、この夢という文字を見たら、きっと、がんばろうという気持ちになると思います。

わたしは、この百年も続いてきた高江小学校がこれからずっと何十年も続いていってほしいと願っています。

「百周年記念式典に参加して」

中一年　比嘉茄南子

私は最初、百周年ということについて、ただすごいなーという感じにしか考えていませんでした。けれど、総合学習の時間に高江や学校の歴史ことを調べるにつれて、改めて昔の人のすごさに感心させられました。

昔は整備された道もなく、学校の登下校も山道を歩いていたなんて私には信じられませんでした。しかし今は、きれいな道も整備され名護に住んでいる私も、楽に通うことができます。改めて昔の高江の人々の苦労が、いかに大変だったのか想像できます。そのように考えると、百周年という式典が、いかにすごいことなのか分かるような気がしてきました。

式典で私は、余興のエイサーに参加しました。大勢の人の前ですることを考えると、緊張して気分が悪くなることもありました。本番前も「大丈夫かな」と心配していましたが、なんとか無事に終えることができました。ちょっと失敗したところもありましたが、たくさんのお客さんに喜んでもらえて良かったです。

百周年にむけての取り組みは、けっこう大変だったけど、百年の歴史を学べたことや、たくさんの人たちの笑顔を見ることができて、今は参加できて良かったなと思います。

新しい歴史を歩み始める高江校と一緒に、私も気持ちを新たにし、自分自身の歴史を良いものにするためにも、いろいろなことを頑張っていきたいと思います。

「百年の重さに触れて」

中二年　又吉　朝太郎

百周年記念式典に向けて、高江小中学校の歴史についての調べ学習や、祝賀会に披露する余興の練習などを取り組んできました。その時はまだ「百周年」という重みを知らず、前日や前々日の準備のときも「面倒くさい」とそんなことを考えたりもしていました。

しかし、当日になって会場である体育館に入ると、そこには沢山の人がいて、知っている人や知らない人も大勢がひしめき合っていました。そのときに初めて「百周年」がいかにすごいことなのか気づくことができました。

歴代の校長先生の中には、もう亡くなっている方もいたりして、百年という月日の長さと、逆に百年という時間の身近さも感じられました。それは、歴史の教科書では感じられない感覚でした。

一言に「百年」と言っても、この年を迎えるまでにたくさんの人たちの努力と苦労で、今の高江校を作り上げてきたのだと思います。そのことからも、この百周年記念式典に立ち会えたということは、とても名誉なことなのだと深く感じました。

昔は道路も整備されてなくて、獣道を通って学校に通っていたと調べ学習のときに

聞き、ハブに噛まれたりしたらどうするんだろう？と、疑問や恐怖を感じると同時に改めて当時の高江の人たちは大変な苦労をしてきたのだと感心させられました。

祝賀会では、練習に練習を重ねたエイサーを一生懸命演舞しました。大勢の人が注目していたのでとても緊張しました。しかし、この会場に集まった人たちにとって、一生に一度であり生涯忘れることがないであろうというこの場で、「恥ずかしい」という思いだけで、この会の雰囲気を壊してはいけないと思い、自分の持っている力を全て出し切り、精一杯の演舞を披露できました。

この百周年記念式典に参加して、言葉で言い表すことができないほどたくさんの大切なことを教えられ、学ぶことができたと思います。そして、記念碑に書かれている『夢』という言葉。きっと私は、将来自分の前に立ちはだかるであろう数々の壁を、この言葉を胸に突き破って乗り越えていくのだろうと思います。百年に一回しかないこのタイミングに立ち会えて本当に良かったと思います。

「百周年と自分の成長」

中二年　上間　健太郎

これまで、百周年という式典に参加したことのない僕にとって、あまり百年の時の重みを感じることはありませんでした。しかし、式典当日にいらした人の数を見ると、普段の高江からは想像もできないほどの人数で、その時に始めて「百周年」というすごさを感じることができました。

高江小学校百年の歴史を積み上げてきた人たちがこんなにいたんだと思うと、これまでやってきた、校内外の整備や会場設営、テントを立てたりたくさんのイスやテーブルを運んだりした作業に対して、「頑張って良かった」と思えるようになりました。

それでも僕が一番苦労したことは、余興のエイサーです。運動会でやったものとはぜんぜん違う新しいもので、リズムや動きも難しく、自分に演じられるかととても不安でした。練習でも少し油断すると、みんなの動きについてゆくのに遅れてしまい、覚えるだけでも大変でした。覚えた後も、細かい動きの指導を先生にしてもらい、毎日の練習がとても辛かったです。

しかし百周年の式典に参加してくれる人たちの事を考えると、辛い練習もあまり苦には感じなくなりました。そして、練習を重ね、みんなの動きに自分の動きが合ってくると、それまであった不安も、だんだんなくなってきました。

本番当日、予想よりもはるかに多い人たちの前で、緊張はありましたが、練習の成果を発揮して、たくさんの拍手をもらえた時は、とても嬉しかったです。

エイサーをはじめとして、いろいろな形で百周年に参加できたことをとても誇りに

思います。そして、これからも今回学んだことをいかして、高江の先輩たちと同じように、いろいろなことに挑戦し、自分を高めていきたいと思います。

百周年を通して

中３年　石原　宙命

私は、今日の百周年記念式典はうまくいったと思います。

今回のために、前々からの準備を頑張っていました。全児童生徒職員でプランターの移動をしたり、体育館の掃除をしたり、頑張っていました。私も記念碑の除幕式のあいさつなどいろいろなことをみんなと頑張っていました。

今回は、みんな満足することができたと思います。準備など頑張ることでみんなの団結力がより深まったのではないかと思います。

出し物のエイサーの練習も頑張っていました。行き詰まったりしていましたが、みんな黙々とやっていました。

本番で、２～３回失敗をしていましたが、一生懸命することが出来たと思います。私は、高江校にいて本当によかったです。

百周年記念式典に参加して

中３年　盛　智紀

僕たちは、百周年に向けてエイサー練習や校内清掃を頑張りました。エイサーは、「てんさぐぬ花」と「風の結人」の２曲を練習しました。最初は２曲覚えられるか心配でしたが、覚えることができたので良かったです。

校内清掃では、昼の清掃時間を利用して、セメントの壁をみがいたり、プランターを並べたり、とても大変でした。

百周年前日の土曜日には、地域の方々が、朝早くから夕方まで、作業をやっていました。

百周年当日は、高江小学校卒業生や前職員、地域の方々多数参加していました。その中でエイサーをして、とても緊張しましたが、大きな声を出して堂々と踊れたのでよかったです。

また、僕たちがはった写真は、みんなの方が見ていて嬉しかったです。

僕は、今年でこの高江校を卒業してしまいますが、これからも高江校の歴史を積み重ねていけるよう、いろいろな行事に参加していきたいです。

第八章

―座談会―

懐かしき高江を語る座談会

参加者：稲福可栄(昭和３年生)、高江州義賢(昭和７年生)、高江州義一(昭和 12 年生)比嘉恵子(昭和７年生)、比嘉良昭(昭和９年生)又吉弘(昭和７年生)
渡嘉敷直吉（大正 15 年生)、渡久地芳(大正 12 年生)、糸洲政子(昭和 6 年生)
今井泰子(大正 10 年生)、西銘芳(昭和３年生)、高江州ナエ（昭和４年生)
喜屋武盛祥(昭和 14 年生)、喜安名サヨ(昭和 15 年生)、比嘉良寛(昭和 13 年生)

司会：崎浜静男
記録：崎間憲政

７０歳以上の部
場所：高江小学校図書館
期日：２００８年８月２３日

● 司会
今日は高江の昔の話、懐かしい思い出話を語り合いながら、この座談会を十分楽しんでもらいたいと思います。楽しい座談会になりますようによろしくお願いします。そして語り合った事は高江校百周年記念誌に編集して掲載されます。先ず、高江校は川田尋常小学校から独立して高江国民学校になりました。独立前の学校の様子はどうだったのか遠慮なく話してもらいたいと思います。

「僕は昭和３年生まれで昭和１０年に入学し卒業したのが１６年、高等科卒業したのが昭和１８年ですが、当時はかやぶきの校舎が２つありました。１、２年は小さい校舎で土間で、机が並べられていました。担任は国吉エミでした。それから３、４、５、６年が大きい建物で４学年の複式授業でした。先生は１年から６年まで本永夫婦の２人で教えていました。ですから殆どが自習でした。先生の話を聞く時間は５、６分程度だったと思います。本永昌保先生と国吉エミ先生の夫婦先生でした」

● 司会
では話を進めていきましょう。新しい校舎の頃（昭和17年～20年）の先生方は誰だったんですか？

「本永昌保、本永エミ、宮城正昌、宮城ヨシ、仲里泰子（今井）、比嘉利男（新城）校長大城栄俊の先生方でしたね。」「昭和１６年に宮城正昌先生と奥さんのヨシ先生が喜如嘉校からこられた。まだ新しい校舎が出来てなかった。昭和16年に国民学校令が施行されて学校も東国民学校高江分校となっていたわけです。私は昭和１６年４月、国民学校１年生として入学しました。かやぶきの建物で土間教室で複式授業であったことをはっきり覚えています。「アカイ、アカイ」「アサヒ、アサヒ」･･･国語の本のはじめにありました。新しい校舎造りの瓦運搬もやらされました。新川の河口から赤瓦を運びましたね。新校舎が出来たの昭和１７年です。２年生の時から新校舎で勉強しました。新しい校舎は赤瓦屋根で４教室つづきの長い建物でした。廊下があって自分達１、２年の教室の廊下の隅が職員室でした。毎朝始業前に本永先生が全教室に向って詩吟「あさみどり　すみわたりたる　おおぞらの・・・」「いかならんことにあいても・・・」を大きな声で吟じていましたね。それから授業がはじまりました。

● 司会
新しい校舎が出来たのは１７年ですね。

「昭和１６年に施工して１７年に落成したことになりますね。その時はまだ東国民学校の分校ですよね。新校舎で新年式、卒業式、四大節の儀式も行われていましたね。儀式の時は校長先生がうやうやしく箱が持ってこられて、中から巻物が出されて朗読していましたね。その間生徒は頭をさげて聞き入っていました。（後でわかった事ですが教育勅語だったんですね）朗読される先生は白い手袋をやっていました。その頃の先生方は、エミ先生、淳子先生、泰子先生、利男先生、昌保先生方で多少の入れ替わりはありますが昭和１９年に東国民学校から分離独立し初代の校長として大城榮俊先生が着任された事になりますね。」

● 司会
新校舎が出来たのは昭和１７年間違いないですね。

「昭和１６年に施工して１７年に完成したことになりますね。話は学校創立の頃にもどりますが、記録もない昔のことですね、学校の沿革誌に明治４１年に小浜の上に分教場ができたとありますが小浜の上の広場にあった学校がクバニー学校と言われています。その時の先生は郵便局長だった英雄さんのおじいさんの宮城朝太郎先生だったようですね。その先生が詠んだ詩のようですが「やんばるぬたびやいくたびんさしがみるかたやねらん海と山」がありますね。」

● 司会
話を新校舎のことについてもう少し話合ってみましょう。赤瓦屋根の床張り４教室、ガラス窓のすばらしい校舎があの頃どうして高江に出来たのかね・・・きっかけは何だったのか・・・。

「昭和１６年に国民学校令が施行され、高江校の在籍も多くなって来た、そして昭和１９年に独立校になっていることから時代の流れもあったのではないのかね。東国民学校からの分校独立の準備じゃなかったのかね記録がないからあくまで推測に過ぎませんが・・・」

● 司会
校舎建築には莫大な資金がかかったでしょうね。当時高江の部落には校舎建築するだけの財力はなかったと思われるがどこから資金が出たのかね。

「これも推測ですけど県への要請で公費でできたと思われますね。地域住民は敷地の地均や資材の運搬等の労役の提供は厳しいものがあったでしょうね。つるはしで岩板をけずり落し、スコップ、モッコ、ザル等で頑張った姿が目に見えるようです。大変なご苦労があったと思われます。古老に聞いた事ですが工事は国場組がやったようですね。資材はすべて山原船で新川河口まで運ばれそこから人力、馬力で行われたようですね、全校生徒も瓦運搬には動員されました、上級生は屋根をふく際の赤土ねり、投げ上げなど頑張ったようですね。それから同じ頃学校のすぐ隣に立派な赤瓦屋根の建物がありましたね。営林署の山管理人（山びさ）の住宅としてありましたが戦後は高等科の教室や職員室、校長住宅として長く利用されていましたね。深い井戸付きで立派なものでした。戦後の学校の様子についてですが高江校は他の地域より７ヶ月遅れて学校が再開されたんです。捕虜されて住民はみんな大宜味や国頭に収容されて、部落は廃墟状態になっていた。あの赤瓦屋根の校舎も戦災は免れたが杉の柱や床板などが抜き取られ倒壊しましたね。しかし教員住宅と営林署の管舎は残っていた。地域住民が捕虜収容先からじょじょに帰郷し学校の必要性が高まり、玉城校長先生を迎え学校が再開された。倒壊した跡地と運動場のはしにかやぶきの校舎をつくり、残っていた教員住宅と管舎が利用され学校が始まりましたね。当時の先生は校長は玉城先生、絹先生、節子先生、清吉先生、義盛先生その後フジ先生で先生方の給料も僅かなものでタバコ１ボールが買える程のものだったようで、先生方の入れ替わりも多かったと思います。」

● 司会
戦前高江校の校歌があったそうですが、どなたか憶えてますか？

「昭和１３年頃ですね、あれは校歌ではないですが歌われている歌はありましたよ。本永先生が作ったそうです。」
● 司会
ちょっと聞かしてくれますか？

「玉川の流れの新川の・・・３番まであるんですよ。昭和１３年頃に作られたんです。
本永先生は本校に２度勤務しているんですね。僕は昭和１９年の入学ですがエミ先生と本永先生はおられた。当時は新川にはつつじがいっぱいあって真っ赤な花が見事に咲いていました。現在はまったく見られませんね。「学芸会」「運動会」「私がやると言って」「今日来たかいがあったよ」「先生もたいしたもんだね」ハハハ（笑）「あの頃のね思い出が・・・覚えてない」「覚えてない」「多くはないからね」「卒業式の前とか」「あの頃学校行事でまず代表的なのはまず運動会よね」「運動会」「その次は遠足でないか」「遠足や」「そして学芸会、遠足、終了式、卒業式･･･などの学校行事も部落全部参加してだったね」「遠足は安波まで行ったよね」「戦後よ戦後」「戦前には行った事ない」「戦後だったかわからんが」「学校の先生を道案内して」「安波の学校まで行った事ある」「僕は何回か道案内で」「戦後の話ですよ」「あの頃親父がPTA会長だったから」「教育委員会から先生方来られる時に道案内して３、４回くらい安波まで道案内して」「喜んで行きましたよー」「遠足は川田や大泊の浜とか小浜の上の浜とかでしたね」

● 司会
それからね、どんどん前に進んでいますがあの頃、学校での遊びはどんなでした？じゃ遊びに入る前にね、運動会の話が出ているから語ってください。

「運動会の話ですね」「１番思い出に頭に記憶にあるのは音楽隊ですね。入場する時のね楽隊、オルガン１つでしょう」「他は草笛を吹いていましたよ」「草笛隊で憲祝さんなんか非常に上手だった、僕のあこがれの先輩で大先輩のように草笛吹きたいなーと思っていましたよ。」「入退場の行進はすべて草笛隊がやっていました」「あの時の体操着は男は半パンツ、女はブルーマーだったね「あの時の競技は短棒投げとか手榴弾投げ、騎馬戦、棒倒し･･･運動会は部落中の人が集まって盛り上がったね、運動場は今考えたらね本当にどれくらいの広さだったかね。周囲がね５、６０メートルしかなかったですよ。拡張して年々少しずつ拡張してようやく一周１００メートルぐらいになったね」「運動会の種目はほとんどが対抗競技だったね」

● 司会
対抗の組分けはどうでしたか？

「字対抗から生徒数が少なくなって後になっては川を境に」「川向こうと川こっちと２つに別れてパッチリコーでしたね。あれ大変だったね」「応援合戦までね」「応援合戦も大勢集まっていましたね」「集まって赤と白だからね」「そうそうそう」「あなたは川向こうでしょう、僕らは川こっち」「こっちは人数少ないからかしないさい」と、貸したら返してくれなかったな。

こんな事があって新川の人達は割れてね、一時的に仲たがいして大変だった」（笑）「本当」「下新川でも」「川、まず新川からこっちと小浜の上、高江というと向こうも極端に少ないんですよ」ハハハ（笑）「生徒数が」「それではいかんから、新川を境にしたら新川が２つに割れるでしょう」「そうしたら僕らは車組になるし」「なるほど」ハハハ（笑）「新川の組が割れるさー」ハハハ（笑）「誰がこんなやな考えしたかなー」「いや、昔対抗するとね、もう」「生徒数が少ないもんだから」「あの頃は生徒１００名越しているでしょう」「１２０名ぐらいだったかな」「いやーあのー新川からこっちというともう3分の２－ぐらいになる。組分けでももめた時もあったんです。」「しかし生徒が１２０名時代もあったんだからな、終戦直後でも７、８０名おったんじゃない？」

● 司会

学校での遊びはどうでしたかね？

「学校で僕らが遊んだのはタンジューとかよ、センチ玉とかよ、パッチー、武士の絵描いたあのパッチー、センチ玉晩までやっていたな」「タンジュー小といってこうやりよったさーな、棒小をななめに置いて頭小打って上がったら打つだけよ」「そうそう、それね」「それから棒の何倍の距離飛んだか目測で言って合計点数で競って遊んだね」「それからセンチ玉」「というか今、ビー玉って言いますけど」「ビー玉穴５つ掘ってあって、遊んで競う遊びで当てて最後は当てた者がビー玉を取った。」「このビー玉遊びは女はやらなかったね」「石なーぐー」「石なーぐーか」「石とりをよくやっていた。それから危険な遊びだったが釘立てもあった」「あれはね、釘立てといってよ、あれも陣取りであったさ」「陣取りであったさ」「陣取り」「相手のもの囲んでいくって、何回か囲んでから進行をふさいでとどめさして出れなくなったらもう終わりだった。」「危険な遊びで鉄砲の弾の先を抜いて火薬を取り出して火をつけて遊ぶこともあった。」「また、運動場でほとんどの女生徒と下級生が一緒に遊んでいたのは大きな輪になって〝ねずみ取り〟また、2組に分かれて〝あの子ほしい、この子がほしい〟と歌いながら集団で楽しく遊んでいたことは覚えている」「それからジャンケンで2組に分かれて陣取り、陣を後から出た者が先に出た者を捕虜し人数を減らして陣を先に踏むと勝ちとなった」「それから〝石けり〟〟押し出し〟〟引き出し〟雨天の時の室内では〝石とり〟〟あやとり〟〟まりつき〟などで遊んでいた」「戦後には〝押し出し〟という遊びで7～8人2組に分かれサークッの中の陣を相手の妨害を押し切って早く陣を踏めば勝ちとなった」「遊びも戦争につながっていたようですね。」

● 司会

野球はやっていたかね？

「野球はね戦後はありました」「ソフトボールの配給あってからよー」「僕らのころもあの、宮城先生が着てから」「野球教えてもらっていましたよ」「あのー清吉なんかピッチャーやっていたのを覚えていますからね」「戦後野球が盛んになりましたよ」「村内3校交流の大会も東中学校でやりました。優勝はできなかった。」「運動場がせまかったからボール拾いに時間が掛かって十分な練習出来なかった」「これ遊びの中に入るが川に泳ぎに行ったの覚えてる？」

「覚えてるさー」「休み時間によークービ（グミ）食べに行って授業に遅れて先生に怒られたよ、今はクービないね、おいしかったね」「昔の人は"クービ"も選んで食べていたそうだよ"赤クービ""白クービ"があるが"白クービ"がよく食べられていたようですね。舌から血が出るまで食べたね」

● 司会

「これも今日話題にあげたいですね」

「遠足かねて東校で種痘したことがありますよね」「川田によー遠足の時に覚えてませんか天気悪かった学校着いたらね川田の学校で天然痘の予防のための種痘やったさー」「痛かったね」「３年生の時歩いて」「あれは遠足兼ねていたはず」「宮城の売店でちょっとアメ玉小も買ったりしたさー」「種痘は僕らは高江でやった」「戦前の話だよ」「自分の腕にある大きなカンパチはよー」「家でやったんでないかな」「昔は高江は東校まで行かないと種痘もできなかったわけよ、医者が来なかったんだ」「あんまり遊んだおぼえはないね」「他人の子守ばっかりさせられていたから、草刈りや子守りーと遊ぶ時間がなかった」「遊びはみんな戦争に継ながっていた、陣取りと言ってね」「そうそう」「こんなしてねー、はかやーはかやーしてからね、当てるでしょう、また測って取る、やったね陣取り」「またよー女の子たちの遊びは、うすえー小ねー小さな宝を穴掘ってから隠す、そしてあてっこする遊び。あんな遊びもうんと楽しかったねー捜してからねー見つけたらよー又交代でさー、「輪ゴム遊びは戦後だね」「運動会の競技にゴールまーせーもあったな！」「今でも運動会でやるよね」「針金の輪があるでしょう」「うん」「あれ上等であるわけさ」「今と違ってね昔は竹の輪だった」「竹のないかな」「竹の輪はあの一砂糖樽のたがをはずしてそれを回していた」

● 司会

戦前の話はもう終りましょう。

「戦後もやりました」「今でもあの輪―もってくれば大丈夫だけどなー」「いい運動小だったさー」「高江の運動会来て下さいあれありますから」「あるのか」「ゴールまーせーあるよ」

● 司会

じゃーあの一戦後のね終戦直後今度はあの話題を変えてあのね終戦直後、最初のかやぶき校舎がどの場所にあったか誰か知っているかね。

「校門入ってすぐ突き当たりで」「終戦直後のかやぶき校舎は親たちが造ってくれたんだよね」「松の丸太を切り出して」「建築大工経験者の中村さん、崎間さん、憲栄さん、渡久地さん･･･の方々が中心になって校舎跡と運動場の端に２棟茅葺きの堀建校舎が造られた。戦前からの教員住宅（校長）は残っていました。また校地隣りの営林署の管舎が残っていたので校舎として使用されていましたね。」

「他の地域に７ヶ月遅れているんですが、昭和２１年（１９４６年）５月できたんですよ、その時にこの玉城幸男先生が２８歳の校長で来られた。池原絹子先生一緒にね、照屋節先生、西銘清吉先生、高江州義盛教頭の先生方がおられた。」　「学校再開当時は担任もいなく先生方が交代で漢字書かせたり、掛け算九九させたり、先生が時々まわってきていた」　「高等科８年

制だった」「玉城校長先生が砂場（幅跳びができ）をつくるには運動場にある建物（かやぶき校舎）はない方がいいということで撤去した。そして砂場をつくった。スポーツマンだったからね。砂場づくりは大変な作業だった。川の砂はすぐかたくなるから浜砂でないといけないということで砂運搬は青年、全校生徒でやった。川田の浜から車で牛道まで運んできた砂を青年が馬をつかって、またかついで運んだ。砂場をいっぱいにするために生徒は小浜の上の浜から砂運搬した。出来上がった砂場は走り幅跳び、走り高飛びに使用された。だが大雨の時は運動場からの泥水が入り浜砂も赤土が混ざりかたくなり鍬でたがやして使用していた。」「当時は１年生と２年生と３年生がひとつになって。２年生になったんですよ、あの一稲福和男さんひとつ僕より年上、あの清光君、愛子もひとつ年上だけど当時１９４４年の小学校１年生と２年生と３年生が１つの学級になって２年生なった。だから１番多かったわけよ」「昭和１９年に、あの戦争なって、終戦後学校が再開された時（昭和２１年）　また２年生になった。」

「フジ先生は授業の前に本を読んで聞かしました。それもとても印象に残っています。僕の場合はお父さん同士が非常に親しかったので先生ではなくてお姉さんみたいに甘えていたんです。３年生の時にチョークボックスの中に青だいしょうを入れておーたらチョークボックスを開けたら飛び出てきて」「エー!!」ハハハ（笑）「ビックリさせたりさせた」「義一はネーこういうやなまくだったんですよ」ハハハハ（笑）「それから終戦直後だから弾遊びもしましたね。信管のままだと爆発するけど火薬だけだったから爆発しないんですよね、雨降っている時に、萱葺き校舎のところで火を着けて燃やしていたら「フジ先生もうビックリして」「うん」「爆発するの」「信管はずしてあるから大丈夫。低学年の頃だから本当にやんちゃな遊びをしていた」「当時トランジスターラジオがあったね」「めずらしかったよー」「あの大きさでね、色は少し茶色っぽくて大きさは１０ｃｍ×２０ｃｍ×３０ｃｍの箱型でね、最初全校生徒で指揮台の上に置いて聴いたんですよ、でも何を言っているのかはよく意味わからかった。」「日本語もよくわからなかったからだろうな。最後にね、エヌ、エイチ、ケイ（N、H、K）というのが聴こえる。あのエヌ、エイチ、 ケイとい言うのは何の事ネーと先生に聞いてもわからなかったから自分たちでこれ終わりという意味だはずよと決めていた」ハハハ（笑）「必ず終わりにはエヌ、エイチ、ケイ」「箱の中から音楽や歌が聞こえてくることがめずらしくて楽しかった。」「あー終わりって」「僕は月の砂漠を聴いたもんだから、とくに印象に残っているもんねー」「あのラジオは無償配給でね、宮城政忠先生があの田嘉里から山越えし～持ってこられたと思う、昭和２７年に戦後の最初の瓦屋根石造り校舎ができましたね」「そうそうそう」「私達砂運びしたよう」「遠くから砂利運んだよ。車の浜から砂運だり」「わったー１年生の頃はよー、かやぶちやーの校舎が並んでいたさーねー」「戦後の学校校舎造りはブー（夫役）で造ったんですかね」「もうあの頃はみんな総動員ですよ」「石運びましたよ」「中学生の時、２年か３年まで」「静男先生が来られた時だから」「あれはあれですか、かやぶき、かやぶきの時からすぐこっちに上がってきたんですか」「僕がきた時はすでに石造り校舎」※石造り校舎２教室

でそれぞれ仕切って（教室、備品室）（教室、職員室）として使用されていた・壁面石積みガラス窓・屋根は合掌造りで赤瓦であった・中学生の教室であった。建築工事の時工事やってる人の話しでは下の川の石はなくなるはずよと言っていた。沢山の石が使われたからな、シージョーグムイのあの辺まで」「石はよー大きいのもいいんですけどねー小さくてもいいんですよー」「間、間に入れるからねー」「石積み大工も言っていたんだけど、どれくらいの大きさがいいんですかって言ったら、いやー、イッターちんちんぐらいでもいいよって言ってよ、ハハ（笑）わったーちんちんは小さいのにって言ってよチャー笑いした」「沢山の石で出来たあれはりっぱな校舎だったですよ」「わったーの時代は」「石造り校舎を壊した」「あぶなかったから」「学校移転したから壊したのかなー」「そうですね」「おいとけば良かったのになーあの校舎」「ああー上等だったよーあれは」「あぶないということで壊したんでしょう」「今の校門入り口にある石碑は可栄さんのお父さんが郷友会長の頃に、下の学校に建立されていた碑を移動しているよ、６０周年記念と書いてあるもんね」「学校移転の際に石碑も一緒に移動したんですよ」「高江は言葉きれいって言われているような」「方言でもねきれいさー」「きれい」「与那原から来たり、アーシから来たり」ガヤガヤガヤ「アーシ」「あのう照屋節先生のおじいさん達が来ておそらく１３０年くらい前にしかここは、あの入植してないわけですからねだから元々は高江は、宇宮城なんですよ、例えば僕の親父があの日清戦争で行った時にあの本籍地は宮城５８２番地だった、だから今高江の５８９なっているね、だからさっき話があったように高江は歴史が浅いしあの新興部落だから」「多くの地域から移住して来たひ人達の集落である。」「泡瀬、与那原、本部、喜如嘉、国頭･･･と多くの地域から集まったにしては方言がよく似たね。」「方言はきれい」「きれい、きれいよー」「中南部の人が主でなかったかなー」「同じねー東線で例ば陸上からは来れないし海上から山原船で来るんだから安波あたりでもさ、一緒だけれども、言葉がちがうでしょう。ちがうよね」「ね」「あーちがうよね」「あそこは元々からの地元民だからね」「高江は新興部落だからでしょう。」「まーこれは水ゆいですよ」「水に感謝せんといかんな」「もうそろそろ時間ですのでね、まとめは何もない」「ただ座談会だから」「これからいくらでも話しは湧き出て来るんですが、大体もうこの程度で終わりたいんですが要望として高江のPTAについて話をしてもらいたぃというのがあるんですが」「後援会というの覚えてます」「PTAの前は学校後援会というのがあって、学校後援会長もちゃんとおったんですよ、それから戦後、いわゆるアメリカのアメリカ方式でPTAが出てきたんですね、教育委員会とかそのPTAをね、いつ頃から始まったかーという、そして初代会長は誰だったのかなー」「もう区長が兼任していたと思う」「教員住宅を造ったりみんなPTAが造ってるんです、教育委員会の予算ではなくてそういうのはものすごく大事なんじゃないかと思うんです」「教育委員会制度がない前」「今、高里さんが住んでいる元校長住宅もPTAが自力で作ったんですよね、教育予算ではないんですあれ」「その頃は」「保護会父兄で作ったと言う事だな」「そうそう」「PTAの力が大きかっ

懐かしき高江を語る座談会

参加者：崎間勇(昭和31年)、石原昌信(昭和32年)、浦崎直彦(昭和31年)
高江州義吉(昭和30年)、比嘉憲信(昭和39年)、高江州義勝（昭和32年)
港川緑(昭和45年)、高江州スミ子(昭和34年)

司会：浦崎　永仁
記録：神谷　順治

７０歳未満の部
場所：高江小学校視聴覚室
期日：２００８年８月２３日

● 司会
百周年記念座談会にお集まりいただきありがとうございます。お手元の沿革誌も参考にしながらお話し合いをしていただきたいと思います。同時に図書室では、７０歳以上の方々の座談会も並行して行われていますので、まず、私たちは戦後の復興期に焦点をあててそこから話しを進めて行きたいと思います、それでは義吉さんから話しを打ち出してほしいと思います。

私は昭和１５年の生まれで昭和２３年の入学だったと思います。先生方は１年の担任が久高フジ先生で、２年３年が照屋節子先生、４年５年になって恵子先生、校長先生がそのあとしかわからないがそういう方々でした。同級生には安波地に小渡良徳、又吉元定、小浜の上に昌盛と自分、大泊には、大城清光、車に西銘の勇、新川に良和、憲正、女性とはショージョーの常子、比嘉ひろ子、そういった方々がいました。当時としては同級生が多かった方です。我々の次が勇たちでその次が義勝たちでしょう。もちろん校舎はかやぶきでした。アカミチャー土間のかやぶきで戸がなく冬はとても寒かった。周りはススキで囲いがしてあり入口の所に溝があって雨が降ると土間はぬかるんで水たまりができた。そこをわざとすべりやすくして先生をころばそうといたずらを仕掛けたりもした。寒さも厳しかったがウーマクもよくやった。
● 司会
赤土の土間で黒板があって机、腰かけあってという状況でしょうか。
そうそう黒板もただぶら下げてあり雨が降ったら雨漏りはするしウチアミはするしで、一箇所に集まって、複式学級だったから、とても授業にはならなかった。幸本先生は幽霊話しが得意でよく皆を集めて幽霊話しを聞かせてくれた。授業ができない雨の日はとても楽しみだった。
● 司会
沿革誌に昭和２７年、石造り校舎が落成とあります。私は新川の学校の最後の卒業組です。この校舎は私たちが中学の時に使ったものです。どなたか建設当時の話をしていただきたいと思います。

この石造り校舎は新川川から石を集め上げ、今ならブロックで積み上げたでしょうがブロックの代わりに石を使った合掌造りでした。セメント、石、材木などの建築資材は陸上用舟艇で小浜の上や車の浜に下ろされたものを運び上げ造られました。大人の人達の作業に交じって砂、石を運びは小学校の低学年もさせられました。２年生が１枚、３年生は２枚といったように１日に２、３回のノルマがあって上級生や力のある連中はは浜から５、６枚もってきて途中に隠しておくというジンブンをやった。当時は作業が多くて授業どころではなかった。
● 司会
憲信さんたちもこの石造り校舎建設の時に資材運びをしましたか？

いや、僕らの時には小学校がかやぶき校舎で石造り校舎を中学の時に使ったがかやぶき校舎を壊してコンクリート校舎を建設した時には川から砂運びをしました。昭和３２年に落成した校舎です。石造校舎建設の時の校長先生は宮城政忠先生でした。
なぜ覚えているかというと建治君が16ポン

ドの砲丸でまだかわききらないコンクリートの土間にセンチ玉遊びの穴をあけて校長先生に怒られたのを覚えています。

● 司会

この頃は、自動車が通るような道はなかったですか？

ありません。自動車が通る道は漁泊までで山原船や舟艇での海上交通交易です。

● 司会

山原船を使っての交易ですが、生活物資の入荷や林産物の積み出しは定期的に行われていましたか？

いや、これがですね主に山原船だったから」ずいぶん天候に左右されて、大風や時季によっては遅れる事もあった。ソーメンとか砂糖などは、非常食としてできるだけ沢山買いこんでいました。ただ物々交換だから船が遅れる時は山からの荷がたまるからお金も貯まるということになります。舟艇は燃料を必要としたからだろうの、めったにこなかった。嵩江、クバニーにも舟艇はほとんどこなかった。山原船が入ったら区民総出で伝馬舟をこいで荷物を載せたり降ろしたりでとても活気がありました。山原船が来たのも月に1，2回でしょう。与那原からここまで来るのに１０日かかる事もあったようですから。小浜の上の毛グァーから遠くに山原船が見えて順風ならすぐに着いたが向かい風の時はいつまでも同じ所に止まって見えた。船が着かないと食い物との物々交換もできないからやきもきしながら大変マチカンティーだった。

● 司会

どなたでも当時の食べ物の事とか学校の様子をもう少し話してください。

そうですね、私の生い立ちですが小学校の時、中学になるまでそうですが私の家は日々の衣食に困っていて裕福な過程が収穫し畑に残ったサツマ芋の虫食いやミンジャー芋を薪と交換して食べていた貧しい家庭だったので学校に持っていく弁当も虫食いやミンジャー芋を持たされました。米を持って来る人も大きな芋を持ってくる人もいて臭いのするような粗末な芋を持って行くのがとても恥ずかしくて、持って行かないとひもじい思いをするから持って行くのですが学校近くの橋の下の木に下げておいてお昼になり弁当を食べにいったらカラスに食い散らかされていた事がありました。東京ボンタの風呂敷に包んであったがカラスにやられたらひとたまりもありません。とてもひもじくてね、ソテツなど食べれるものはなんでも食べました。

● 司会

ソテツの実を食べたのですか？

実はあれは高級品で栄養剤ですね、ミソを作っていました。食べたのは幹です。皮を剥ぎ取って削って乾燥させて発酵させる。ソテツはほとんどの家庭で食べられていたが食糧が不足するととても熟成するまでまてないからそれを食べて中毒することもありました。体が膨れていろんな症状が出る、んです。

● 司会

沿革誌の中に卒業生が記念品を贈るという内容がありますが皆さんは卒業の時に何を贈ったか覚えていますか？

僕たちは山で木を切ったお金で大きな柱時計を買って記念品にした。憲信さんたちの卒業記念は今も新川の学校敷地あとに立っている宜保先生が彫った校門の碑ではないですか。そうだった。あの頃卒業記念品の贈呈はある程度恒例になっていたかもしれない。学芸会の使った幕の中にも刺繍されたものがあったと思う。私たちは生花用の壷を買って贈った。自分達の場合も同級生６人で少なかったから壷だったかもしれない。あの頃の刺繍された幕の値段だとそうとう高かったと思うが僕たちは大人と同じように仕事ができて自分達だけでも山に行くようなウーマク連中がそろっていたからその時の幕の代金も国頭一週旅行の費用も全て国有地からの盗伐、当時は生活のために日常的に盗伐が行われていて国有地の払い下げもあったが字中の人たちの毎日の、仕事だから木は切られてすぐになくなり後は、表面を取り繕った名目にすぎなかった、僕らの同級生は皆山アッチャー。君と僕は小学校６年から馬を持って山にいったはず、山官に捕まった事があって、子どもは正直だから誰が山にいるかと聞かれて、お父さんと隣のおとうさんがいると答えたらみんな捕まった。あの頃１番怖かったのは夏休みだった。親達は夏休み前になると子供達の働きをあてに借金返済の皮算用をしていた、雨が降っても風が吹いても山に連れていかれた。僕は中学の時に米軍キャンプの所、ウチャニー川で１人で山泊りをした事があった。他の人達は橋の近くで集団でやっていたが僕はウチャーニー川で馬と２人親達は通いで朝になると食べ物や芋持ってきた。１ヵ月近くも山にいたが心細いともなんと思わなかった。

放課後の辛かった記憶に便所クマー水肥運びがあった。水肥桶に入れて２人で担ぎ橋を渡った川向こうの学校農園に運んだが臭くて、下り道も大変でつまずき転んだりして、汚物をかぶり大変だった。大根やジャガイモなどの野菜にかけたが日常でそんなものを平気でかじっていたからおなかの中には十二指虫や回虫がいっぱいでナチョーを飲まされた時は口から大きな虫が出てきた。

雨が降ったら便所に雨水が入り汚物だまりはすぐにいっぱいになった。便所の側から職員室の裏手に流れる溝があり、雨降りの当番の時にその溝に水肥をどんどん汲み流したら臭かったでしょう校長先生が飛んできて「またお前らか！」とひどく怒鳴られた。

● 司会

修学旅行旅費を山稼ぎでつくったという話がありましたので今度は話題を修学旅行にしましょう。国頭一週旅行からいきますか。

サポート材の８尺や１０尺１３尺などをたくさん切り、その資金で計画は立てられた。当初の計画は安田で１泊し当時バスが通っていた奥で１泊し奥からはバスに乗って名護で２泊の予定だった。しかし初日に高江から奥まで徒歩で、悪路も強行につぐ強行を重ねてつっぱしり、その日のうちに名護に着いた。自分達も国頭一週旅行をしたが引率は崎浜静男先生だった。小浜の上から高江に下りて、今の電発の所に登って、小さな山道を登ったり下ったりの悪路を行きました。安波からの道はだいぶ大きくなったが遠足の興りは訓練から始まったので

はないかと思うほどきつかった。当時は多くの学校が国頭一週旅行していて他の学校の生徒たちも高江校に宿泊した事がある。
僕らの修学旅行の思い出は初めてバスに乗って那覇の玉城旅館に泊まり国映館で映画を見た事や水洗トイレの使い方が分からなかったり初めての食べ物にてこずったりして失敗談が長く尾を引いて今でも面白おかしく語らいぐさになっている。
小学校の頃に久高フジ先生がいらっしゃい。ました。雨降りの時はカッパがないからカマジーを被って登校しました。２枚重ねのカマジーは１０分もするとしたたかに雨水を吸って重くなり途中で脱ぎ捨てていきました。服も本もびしょ濡れで勉強できないからこれ幸いと思っていたらフジ先生が「私の教科書使いなさい」と貸してくれました。私は「この先生よー」と思いながら勉強しましたね。雨が降り続くと家に帰る途中に橋が掛かってない小さな川があり普段は楽に渡れる川も増水の時は川岸のゆし木に登って向こう岸に飛び渡っていました。
大雨の時は激しい流れになって、失敗すると終わりです。教科書を流した事もあったがその時も本がなければ勉強しなくてもいいから幸いだと思いましたね。一度大雨で大洪水になりどうしても帰る事ができないから学校に戻り濡れた服を着て教室で一晩を明かした事がありました。よくも、風邪も引かないで、あの頃の人間はイノシシと同じです。野性そのものでした。生芋でも畑に植えられた大根や人参も引き抜いて生でかじりました。生ミソでも腹いっぱい食べたいと思っていましたね。　　。
衣服やパンツの着替えも少なかったから長いこと同じものを着続けていた。下の川でパンツのまま浴びてそのまま乾かす。洗濯と入浴を同時に行いましたね。楽しみだったのは運動会になると買ってもらった1枚のパンツと1足の靴でした。今のように明日使うから今日買ってくるんではなくして、1ヵ月前に名護に行く人にたのんで、子どもの足のサイズはすぐに大きくなるからと一回り大きいサイズを注文しました。運動会本番に履いた靴はゴロゴロしてとても走りにくかった。普段はめったに買ってもらなかったので破れてもずっと履き続けていた。僕は長男だから弟や妹の子守をよくしたがおんぶしてオシッコをかけられても着替えがないからそのまま寝て、また翌日同じ服で登校した。皆同じように臭いのだからあまり気にしなかった。シッコをかけられた背中はカッパーになって、あの頃の親は子供が生まれるとミルクもないから、バヤリースジュースを持たせて乳飲み子を子どもにおんぶさせた。ヤーサノーシだったが、普段ジュースはめったに飲めないから、少しずつ子どもにも飲ませて自分も飲んで、重くなっても自分ひとりでは降ろすことができないから、重く辛くなったら子どもも泣いて自分も泣いた。親たちは産後すぐ仕事に出掛けた。
あの頃、親や先生によく体罰をくらったが皆は授業中に先生からメーゴーサーくらった事ないか。僕は叩かれるのが日常で頭をおさえると顔を叩かれたりした。親も先生も怖かったね。昔は体罰とは思わなかったんだよね。悪い事をするから叩かれるといって、ごく普通に親も周りも公認だった。学校で叱られたり立たされたのを姉が親に告げ口した時には、学校でも叩かれて家でも叩かれた。

● 司会
次は運動会を話題にしましょうか。

あの頃は生徒の数も多く部落対抗の真剣勝負だった。応援歌がとびだした事もありとても楽しかった。
僕は1番の楽しみは弁当時間だった。普段よりは少しイイ食べ物を家族や大勢の人達と広げ、囲んで、隣は何を持ってきたかと気になったり、羨ましがったりして日常にはない楽しい時間だった。僕たちの時代は太鼓の他にほとんど楽器のない時代だから入場行進もフォークダンスも草笛の音でやっていた。草笛を吹くのが上手な人達がいました。
前日の準備から区民総出で校門の鳥居や音楽室を作り、グランウドを均し、白線を引き、飾りつけに使ったマーニカソテツの葉、を青年達と一緒になって取ってきたり万国旗を運動場いっぱいに広げ揚げたりで前日、の準備から本番まで地域一体となってやった。娯楽の少なかった時代の1大イベント 、で地域みんなの楽しみだった。
１周100mたらずの小さなグラウンドも子どもの目には大きく見えて親子リレーや職域リレーでは大人の人達が管舎側の第三コーナーの急カーブを曲がれずによく落ちて這い上がってきた。
崎浜静男先生はカーブをきらしたら村1番で直線カーブと言われていた。小さな頃から小さなグラウンドで練習してきた訓練のたまものだったのかなと思った。騎馬戦や棒倒しタンブリングなど危険な種目もあって僕は小さかったからいつも五重塔の上だった。落ちてブチクンしたことがあり、教頭先生の人工呼吸で息を吹き返した。
君はいつも上だったよ、僕はいつも下でカタミヤーだった。
自分はあまり運動が得意でなくて、ピリクスだったからほかの行事のほうが好きだった。楽しかったけど面白くないこともあった。運動会の練習は大抵放課後だったから練習を終えて、夕暮れ時になってからやった馬の草刈が辛かった。当時の子ども達は放課後の手伝いに馬の草刈や水汲み、ランプの火屋掃除などをしていた。
騎馬戦は悲惨な戦争を思い起させるから教育上悪いと新聞で論争になって問題になった事がなかったかな。
そうだったかな僕らの時はずっと種目に入っていた。フォークダンスの練習では本当は女の子と手を繋ぎたかったのに恥ずかしがって竹や棒切れを掴み合って練習していた。強がって無理じいしてたのは、たいがい上級生の男生徒で、先生に怒られて尻を叩かれたのも男生徒だった。
当時の子ども達は良くケンカやっていた。。学校では仲が良くても家に帰ったら毎日のように、それがレクレーションでもあったかのように待ち受けては素手で殴り合い、取っ組み合ってた。ケンカをしても一晩寝。たら翌日はケロット仲良くなり、敵対するのもの少しの間だったな。今のような道具を持ったり、陰湿なものではなかった点はよかったと思う。
● 司会
今度は校章を作った時の様子を聞かせて下さい。校章が出来たのは昭和４０年くらいだと思います。この校章は生徒会でデザインを募集し投票し憲信さんのデザインが採用されたと記憶していますが憲信さんは覚えていますか？

昔の事でよくは覚えていないが他の学校の生徒たちが帽子に白線や校章をつけているのが羨ましくて中学2年の3学期に生徒会顧問の棚原先生や生徒会長だった善政たちと作る相談をした事はよく覚えている。生徒会員だった4年生以上に図柄の募集もやったと思う。図柄の制作については鎖やペン羽根などを描いた記憶が薄々はあるが実際には宜保先生が相当な修正を加えて色づけ、意義付けをしてりっぱな図案にしたと思う。

● 司会

昭和34年にパン給食が始まっています。次は給食を話題にしましょう。最初はパンとミルクだけでした。ダンボール箱に入れられたパンは名護からバスで乗せられて漁泊まで運ばれ漁泊から字の車で牛道の共同売店まで運ばれ、そこからは石コロだらけの坂道を生徒が運んだ。ミルクは脂肪粉乳でまずいものだった。マーガリンが出されたことがあって、担任の先生が長い髪の毛を使って器用に切り分けたのを覚えている。当時、僕らの同級生が子豚を買って校長先生の奥さんに給食の残飯で豚を飼育してもらったことがあった。太らせて僕たちと奥さんで肉を山分けにした。子どもの考えというよりも当時の子どもには大人の感じがあったのかな。

毎週月曜日に給食を作る時の燃料として薪を3本束ね持って登校した。車や新川の通学距離ならまだいいとしても遠い大泊からも持たされた。パンとミルクは学校から支給されておかずは自前で家から持ってきた。パッキン付きのおかず入れがあったのを覚。えていますか。おかず箱といっていたが子どもは活発に動き無頓着に登校したから汁が漏れて教科書やカバンは黄ばんで染みだらけだった。おかず持参の給食から完全給食になったのはずいぶん後のことで平識善福校長先生の時からだった。僕はパンがとどかないジューシーメーの日を楽しみにしていたな。

当時は牛道の共同売店から新川へ通じる道は石コロだらけの急な坂道で難儀したのは生徒ばかりではなかったと思う。学校まで自動車道が開通したのは僕が中学になってからで堅い地盤をダイナマイトで砕いた、難工事だったがこの道路の開通は地域住民にとっても画期的な出来事だった。

その頃になると本土復帰運動が盛んで大勢の人たちが旗やプラカード、横断幕をかかげて本土復帰の歌を歌って学校に入ってきました。学校で1泊して翌日に立っていった、このようにして多くの人たちが祖国復帰を願いながら各間の小さな小学校に行進していきました。だから子ども心にも復帰意識の強さや本土復帰の歌をよく覚えている。

● 司会

今度は新川の敷地から今の敷地に学校を移転した時の様子を話題にしましょう。

平識善福校長先生が赴任してきて昼間でも暗い日があった当時の学校環境を改善のためにPTA総会で全会一致で移転決議がされてすぐに琉球政府に申請し決定されました。決定を受けた当初は役場も予算が乏しかったので中学校の英語の先生の通訳で米軍に頼み、高江キャンプの兵隊たちが敷地の造成を始めました。造成途中に長い中断があり、最後は民間の業者が作業をしました。当時、生コンは名護にしかありませ

んからミキサー車やポンプ車を使うことが出来なくてみんな手打ちだったんです。当時のセメントの重量が１袋で40kg、砂、バラスが8トン車でもう何百台ものスラブ打ちでした。丸々24時間ぶっとうしでやった日もありました。区民、学校の職員、中学生なんかも多分手伝いをしたと思います。翌日の朝までした。セメントを捏ね回す人達、1輪車に乗せて運ぶ人達、炊き出しもあって当時の厳しい環境を考えると平識先生だったからこの学校移転事業は短期間に完成を見たと思います。

● 司会

当時の色々な話が出てきていますが話したりない事や、まだ話してない事がありましたらお願いします。

小学校の頃に皆さんは方言札をかけられた事はなかったですか。僕は子どもの遊び場があった車の売店前で方言を使って翌日校長先生に職員室に呼ばれてかけられた事がありました。次に誰かが方言を使うまでずっと首にかけられたから家に持ち帰った時には親には見つからないにように隠しておいて、翌日学校に持っていったら机の中に入れてわざとみんなの前でべらべら方言を使って他の人にも使わそうと仕向けた。

僕は方言札のことはよく覚えてないが方言を使って校長先生に職員室に呼ばれてホーキで尻を叩かれた事がある。

新川に学校があった時は教員住宅は校長住宅と給食室兼用の建物以外にはなかったから先生はほとんどが民家の間借り生活だった。教員住宅はトゥムンクルビにずっと後になって造られたのが最初で最外にはなかったから字のトシビースージや雨が降った時の芝居なども学校を使っていた。学校行事や卒業式の終わりには反省会といって学校でもみんな酒を飲んで盛り上がっていた。当時は地域の中心地そのものでした。

● 司会

昔の話は尽きませんがそろそろ終りたいと思います。長い歴史を紡ぐと言えば大袈裟ですが、頭の中でこの半世紀がだいぶ整理されました。それでは図書室に戻って戦前組の70歳以上のグループと合流したいと思います。お疲れ様でした、これで終ります。

第十章

—資料—

高江区史　―東村史より―

・村落の由来と沿革

高江は大正１３年（分村の翌年）に宮城区の行政区域から大泊以東を分けて、新しく行政区として誕生した東村で１番新しい字である。新しい字であるが高江の由来などについての記録は殆どない。宮城から行政区を分けた理由は、記録がなく口伝えによるもので定かではないが、当時の宮城は現在の高江区域を含めると広範囲で行政運営などで不便であったからだと云われている。宮城から分離した時には大泊、車、上新川、下新川、小浜の上、高江の７つの小字に人が住み小集落と成していた。この小集落すべてを指して高江といっている。その頃高江に住んでいた人々はすべて村外から寄留して来た人達で、もっぱら山稼ぎを生業としていた。その孫で現在高江に住んでいる人々の寄留先を見てみると、我喜屋＝伊計、嘉手苅＝名護、比嘉＝首里、西銘＝与那原、喜屋武、崎間、高江州＝泡瀬、伊地＝佐敷、浦崎＝本部、仲里＝与那原、佐久本＝泡瀬から寄留した人々である。それ以外にも多くの門中が住んでいたが戦後出身地へ帰った者や村外へ転出していった現在住んでいる人々でそれ以外の人々は、戦後移転して来た人々である。

高江は、南、西、北の三方を山林に囲まれていて昔から林業を生業として生計を立てて来た。昭和２０年代前半までは字宮城魚原から高江までの道路が開通していなかったために、輸送はすべて山原船による海上輸送に頼らざるを得なかった。そのような状況から集落は殆ど林産物が集積される海岸近くに開けていた。

最初に人が住み着いたのは新川川河口付近の下新川で、高江発祥の地とされている。その後上新川、小浜の上、高江にも人々が住むようになり集落が形成された。牛道一帯は戦前は人がまったく住んでなかった。しかし、戦後、道路が開通し、交通体形が海上から陸上へ変わったことにより、道路沿でしかも土地が平坦であるなど集落形成の条件に恵まれ次第に住宅が増え集落が形成された。現在では、高江小中学校、高江公民館、沖縄営林署高江担当区事務所、教員住宅、村営住宅、高江協同売店、牛道協同売店など公共施設が集中して高江区の中心地となっている。各小字（班）の集落は現在、上新川を除いて殆ど台地に住宅が建てられている。車地区（３班）は昭和３４年まで旧県道下の太平洋に面した斜面に集落があったが、同年１０月７日に襲来した台風（シャーロット）がもたらした集中豪雨による地すべりで、集落が海岸へ押し出され家屋は全壊した。幸い、人名に被害はなかった。その直後に集落は現在の台地へ移転したが、そこには国有地内であると同時に米軍の北部訓練場内であり、住宅及び周辺の農地は国からの借地である。

高江（タケー）の地名は、境（サケー）に由来しているのではないかと云われている。小浜の上の台地から左下の海岸を見下すと砂浜と河口が遠望できる。安波地川の河口でその川は国頭村地内である。昔この川を境にして右岸に安波地（行政区は国頭村であるが行事等は高江と一緒に行っていた）、左岸には高江の集落があった。この地がタケー（高江）となったと云われている。

高江は他の字に比べ交通通信の発達が大きく遅れた地域である。字宮城魚原から高

江に至る道路は、大泊附近までは昭和１５年頃に開設されたがこれから先は戦争のため中断されたままになっていた。昭和２５年頃、米軍の演習道路として仮設的に高江まで開通された自動車の通行が可能となった。この頃までもっぱら海上輸送に頼っていた林産物や生活物資輸送は、その後陸上輸送に変わり中南部との時間的距離が大幅に短縮され、経済活動は急速に活発化した。しかし、道路が開通したとはいっても急勾配であるため赤土がむき出しの所が多く、雨が降れば民間車両の通行は不能となり、文字通り陸の孤島と化す有様であった。現在のように自家用車が普及していなかった昭和３５年９月から区民の交通の利便を図るために、字独自で路線バスの終点である魚から牛道まで１日３往復、米軍払い下げのジープを運行したが採算が合わず長続きしなかった。昭和５０年代初めまで道路事情は悪く、区民の１番の悩み苦労は交通問題であった。

また、電話の普及も他の字に比べ大きく立ち遅れた。電話の布設は復帰後まで郵便局を起点に距離によって普通地域と特別地域に区分されていて、高江は郵便局から遠隔地にあるため特別地域に指定され個人で多額の工事費を負担しなければ電話の加入はできなかった。昭和５０年代初めに村当局から特別区域撤廃要請が電々公社へ行われ、５３年頃に区域制が撤廃されその後急速に各家庭に電話が普及した。

・　人口の動態

高江は村内で１番人口規模の小さい行政区である。昭和５５年の総人口は１７６人で、慶佐次の人口１７６人と同数であるが、その後高江が減少傾向にあるのに対し慶佐次は増加している。

※　高江の人口世帯の推移

各年３月末

年	世帯	人口			1世帯当り
		男	女	計	
昭和９年	87	207	221	428	4,9
昭和20年	68	152	173	325	4,8
昭和28年	40	118	124	242	6,0
昭和35年	62	151	162	313	5,0
昭和36年	52	149	163	312	6,0
昭和38年	54	136	156	293	5,4
昭和43年	46	115	125	240	5,2
昭和45年	42	83	107	190	4,5
昭和47年	40	80	98	178	4,5
昭和50年	45	65	74	139	3,1
昭和53年	49	72	77	149	3,0
昭和55年	54	87	89	176	3,3
昭和57年	45	68	71	139	3,1
昭和60年	52	77	79	156	3,0
昭和61年	49	77	75	152	3,1

表は村の統計資料に基づいて作成したものであるが、昭和４２年以前の資料及び各階層別構成が不明であるので、世帯数、男女別、総人口の推移を追ってみることにする。東村が旧久志村から分村した大正１２年４月から１１年後の昭和９年４月に宮城から分離して行政区となった当時の世帯数８７世帯、総人口４２８人は、世帯数では核家族化が進行した現在の川田区の世帯数には及ばないものの総人口では川田区の４０８人より２０人多く、当時の東村の生業の中心が林業であったことを考えると高江における林業がいかに隆盛を極めていたかを伺い知ることができる。その頃の高江は耕地面積は僅かで、農業で生計を立てるこ

ことは不可能であった。高江に寄留して来た人々すべてが林業を目的に村外からの移住者である。

終戦直後の昭和２０年には宮城から分離した昭和９年に比べ１世帯当り家族数では僅か０、１人の減少となっているが、世帯数で１９世帯（２１、８％）総人口で１０３人（２４％）と著しく減少している。また、昭和２０年から２５年にかけて他の字では外地からの引揚げや復帰員等によって人口は大幅に増えたが、高江の場合昭和２０年以降今日に至るまで漸減しているのも他と異なる特徴である。

昭和２０年から昭和４０年頃までは統計資料が不十分なため、資料が得られた年、それ以降については紙面の都合もあり２年または３年おきに表に掲載した。まず昭和２０年と昭和２８年を比較してみると世帯数で２８世帯（４２％）、総人口は８３人（２５、５％）と著しく減少している。しかし、昭和３５年、６年には他の字同様世帯数人口ともに一時的ではあるが増加し、その頃を境にして昭和５０年まで毎年減少し続けている。表には掲載されていないが、昭和５１年から僅かずつ増加して、昭和５６年には１７２人にまで回復したが、昭和５７年は再度１３９人に減少している。その後、微増微減を繰返し辛じて２５０人代を維持している。

今後の人口の増減は地域の発展はもとより、学校の維持にも重大な影響を与えるため、国有地の活用等によって農地を拡大し農業を振興して、若者がＵターンして定着しないかぎり人口の増加は望めない。

・　生業とその動態

高江は三方を山林に囲まれており林業を営むに他の字に比べ有利な条件にあった。その好条件を生かして昔から林業中心の経済活動が行われて来た。しかし、周りの山林の殆どが村有林野で占めているため個人が勝手に山入りして木を伐採することは許されず一定の期間、区域等を定めて部落又は何人かの団体で国有林野の払い下げを受け、その区域に限って入林が許された。

林産物を山から切出して荷座（ニーザー）又は薪座（タムンザー）と云われる広場（集荷場）まで運搬する方法は、人力か馬力によることが殆どであった。人力による場合、男は林産物を肩に担ぎ女はカサギヂナと云うシュロで編んだ紐を用いて運搬した。山から運び出す回数は人力の場合１日に５～６回、馬を利用する場合が２～３回であった。運び出された林産物は戦前は海上輸送が主であったため海岸の集荷場に集められ、毎日又は一定の量に達したら船主や仲買人に売渡された。戦後は、トラックによる陸上輸送に変わったため、牛道や車など積込みに便利な所に集荷場ができた。山から切出して運搬する方法は戦前も戦後も同じであった。戦前の輸送方法は、海岸の集荷場からは船人（フナトウ）達によって天馬（ティンマー）と云われる小型の船に積まれ、沖に停泊している山原船に積みかえられて泡瀬、与那原、馬天方面へ輸送された。山原船は天候のよい時は週に１度か１０日に１度の割合で、車、下新川、高江、大泊などの海岸から林産物を運んで行き、帰りにはサツマイモ、米などの主食、塩、油、みそなどの調味料のほか日常生活に必要な物資を運んで来た。船主の多くは平安座、泡瀬、与那原、馬天方面の人々であったが、

戦前は高江出身の西銘、仲里と云った方が山原船を所有していた。また、戦後の一時期仲里、高江州、山城、伊地と云った人々が共同で動力船を所有し、中南部へ林産物を輸送していた。戦前の林業は、薪、木炭などの燃料のほか丸太材、ヤマク（角材）キチ、山竹などの建築資材、エー（藍）、ティカチャーガー（シャリンバイの皮）、ムムガー（山桃の皮）等、染料も生産されていた。ヤマクは原木をオノで削って角材にした物のことである。オノでは角材は作れても板状の物を作ることはできない。このようなこともあって明治の終わり頃、本土出身の佐々木と云う人が新川川下流のシーゾーグムイ近くに水力を利用した製材所を設置して、主にクリタ（砂糖ダルの材料）を製造していたが、経営は饒波と云う人に変わり昭和初期に廃業したようである。また、年代は定かでないがムムガー工場が設置され、山桃の皮を釜で煮詰めて固形にした塗料の原料を生産していた。藍の栽培も盛んでエー壷は方々にあった。現在もカーナブイ、開墾ガーラ、佐々木勝子さん宅近くの谷間にその跡が残っている。

戦後一早く車に製材所が設置されたが間もなくして牛道へ移設された。沖縄の復興が本格化するにつれ本土から杉材や外材が輸入されるようになり、山原林はそれ等に押されて年々需要が減少し昭和３５年頃には製材所も閉鎖された。また、都市地区において燃料は薪から石油やプロパンガスに変りはじめ、山原の薪炭材の需要も急速に減少したため山稼ぎは年々減り、林業は衰微し他の産業への転換を余儀なくされた。

他の字では昭和３０年代初め頃から林業から農業への転換が図られつつあったが高江区の場合、林業への依存度があまりにも大きかったためと、村有地を払い下げて農地造成しようにも道路がなかったことなどから農業への転換がおくれた。

高江における農地の拡大は、車と牛道の間の県道右側の国有林野を借地して開墾したのが最初である。その後村有林野の払い下げにより下の表に示す通り昭和４９年以降急速に農地は拡大された。

年度	農家数	耕地面積	一農家当り
	戸	アール	アール
昭和 28 年	36	165	4,6
昭和 35 年	35	409	11,7
昭和 36 年	44	841	19,1
昭和 39 年	33	801	24,3
昭和 46 年	12	1,027	85,6
昭和 49 年	15	1,675	111,7
昭和 54 年	26	4,660	179,2
昭和 59 年	29	6,174	212,9

その頃まで村内で１番少なかった字別耕地面積及び１農家当り耕地面積は、昭和５９年度には字全体で６、１７４アールと昭和４６年に比べ６倍となり、１農家当り耕地面積では村平均の１８７アールに対し２１２アールと村の平均を大幅に上回り宮城の２４アールについで二番目の規模である。

林業が衰退した現在、それに代わる所得を確保するため５人の若者が旧高江校の跡地を村から借り受けて、共同で県、村の補助による林産集落振興対策事業を導入してシータケの栽培に取り組んでいる。

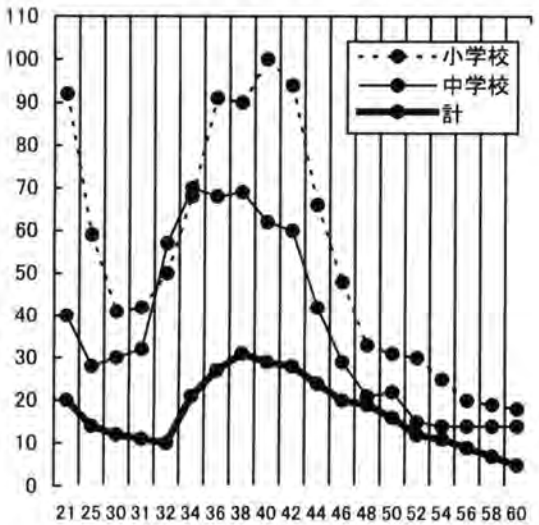
畜産は戦前から終戦直後にかけて各家庭で豚の１、２頭飼いが盛んであった。しかし、現在では各家庭において家畜の小規模飼育はまったく行われていない。車の１農

家が畜産基地高江団地を国の補助事業で完成させ、昭和５９年度から牧草栽培と繁殖牛の飼育を行っている。

・ 教育

高江のはじめて設置された公共施設は川田尋常小学校高江分校である。高江小中学校は１字１校区であり、昭和６１年度の在籍は小学校が１１人、中学校が５人、合計１６人で村内で１番規模の小さい書学校である。明治４１年に川田尋常小学校高江分校として小浜の上に新設されたが、明治４５年には上新川へ移転し、さらに昭和４４年１１月９日現在地へ移転された。

分校の頃から高江だけで学区域になっているため児童生徒数が少なく、昔も今も複式又は複々式の学級編成となっている。



表で明らかなように、児童生徒数は昭和４０年には小学校７０人、中学校３３人、計１０３人ともっとも多く、現在の有銘の児童生徒数１１３人に近い在籍があった。その後毎年急激に減少し１０年後の昭和５０年には小学校２０人（２８、６％）中学生１３人（３９％）に減少した。さらに１０年後の昭和６０年には、小学校１１人、中学校５人となっている。この数字を昭和４０年と比較してみると、小学校が１５、８％、中学校が１５、２％、計１５、６％の在籍となり８４、２％の大幅な減少となっている。児童生徒数の増減は人口の増減と密接な関係にあり、今後農業が振興されて若者がＵターンして定着しない限り大幅に児童生徒数が増加することは期待できない。

現在地に移転して以来、教室、体育館、プール、運動場などの教育基本施設をはじめ教育備品は着実に整備され、小規模校ながら高い施設水準となっている。

PTA 活動は会員数が少ないため正会員、準会員で組織されているのも他校区と異なった特徴である。正会員は在学児童生徒の父兄、準会員はそれ以外の区民である。作業や運動会等の諸行事には区民全員が参加協力することになっている。

編集後記

編集後記

昭和１９年６月２４日に高江小学校創立百周年記念事業期成会が結成され学校百年の歩みを検証し、さらなる未来への発展を願って記念事業の一環として企画されました。本校百年の歴史と現状を正しく記録し後世に伝える事を編集方針として写真を多用した読み易い誌面づくり目指して作業が始まりましたが、昭和２２年までの資料が無いに等しく資料集めは困難をきたしました。

資料不足と力量不足で必ずしも皆様の期待に応えられるものが出来たとは思えませんが本校初めての記念誌の刊行が今後の資料の一部にでもなればと思います。また、多くの同窓生や関係者が愛読されて、高江校に思いを馳せ、本校の教育発展に寄与することができれば幸に存じます。

沿革誌の整理、作成や教育資料を提供された学校の先生方、資料不足を補うために実地した「懐かしき高江を語る座談会」に快く出席いただき、戦前・戦後の記憶を語っていただきました諸先輩方々、回想録として玉稿を寄せられた本校ゆかりの先生方や同窓会のお２人、貴重な写真を提供して下さった方々、資料収集に奔走された期成会役員や郷友会の皆様に紙面をかりて厚くお礼を申し上げます。

最後に編集作業をしていただきました高江共同組合の皆様に心より感謝申し上げます。

平成２１年２月日
高江小学校百周年記念事業期成会
記念誌編集部長　浦崎 永仁

高江小学校創立百周年記念誌

2009年　（平成21）　3月31日発行

発行　東村高江小中学校
創立百周年記念事業期成会
沖縄県国頭郡東村高江83－3
電話(0980)43－2683

編集　高江共同組合
沖縄県東村高江85－30
電話　(0980)43－2243

印刷　株式会社オーエム
〒537－0025
大阪市東成区中道4－5－14－101